

かけがわ学力向上ものがたり

―我が校のものがたり 実践編―

はじめに

「そこから、ものがたりを始めましょう。そして、その子が自らものがたりをつくるよう、導いていきましよう。」

※「かけがわ学力向上ものがたり」の表紙に掲載されている浅井正人教育長の言葉から

各教室では、たくさん「ものがたり」がありました。掛川の子どもたちが、主体的に学習に取り組む姿が見られました。夢に向かって、自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子どもの育成につながる「ものがたり」が展開されました。

平成二十六年、掛川市教育委員会では「学力」とは何かを、学校、家庭・地域で共通理解をして、どのようにしたら学力の向上が図れるか、その理念や方法を「ものがたり」としてまとめた「かけがわ学力向上ものがたり」を策定しました。

各学校においては、児童生徒の学習状況に基づいた各学校独自の特色ある「我が校のものがたり」を作成し、全教職員が共通理解のもと、学力向上への積極的な授業改善を進めてきました。

この度、本年度の「我が校のものがたり」による実践の中で、特に成果が表れた代表的な実践を一冊の本にすることができました。各学校並びに、実践報告を提出していただいた先生方におかれましては、御多用の中、多大なる御協力をいただき、誠に感謝申し上げます。「我が校のものがたり」における各学校の願いや、子どもたちの実態に応じた素晴らしい実践の数々から、子どもたちの充実した学びの姿が想像できます。

今後、掛川の子どもたちの学力向上の実現に向けて、学校、家庭・地域、教育委員会が連携して、教育活動の充実に努めてまいります。

平成二十七年二月

掛川市教育委員会

目次

【教材研究・授業改善】..... 1

 西山口小学校 金子紋也 上内田小学校 雲母政敏 城北小学校 近藤奏子

 第一小学校 岡村 梓 第一小学校 大須賀勇太 第二小学校 田中孝弘

 原谷小学校 溝垣千春 中小学校 中根明美・増田七奈子 大坂小学校 榛葉貴博

 大坂小学校 大石香奈江 千浜小学校 佐藤真琴 横須賀小学校 藤田真智子

 横須賀小学校 諸田智恵 栄川中学校 岡村直哉 東中学校 太田静男

 東中学校 田浦 伸 西中学校 石川真男 桜が丘中学校 金田 晋

 原野谷中学校 石山 近 城東中学校 大杉鏡康 大浜中学校 河合伸昭

 大須賀中学校 梅田 晃 大須賀中学校 大杉鏡康 大浜中学校 河合伸昭

【学習集団づくり・基礎学力の定着】..... 24

 東山口小学校 野口麻子 西山口小学校 永井和典 城北小学校 杉山吉美

 原田小学校 田林圭太 土方小学校 殿岡基弘 大淵小学校 寺本 健

 北中学校 柏木麻希 大浜中学校 大谷加奈子

【主体的・協働的な学び支援】..... 32

 第二小学校 太田 愛 中央小学校 平野良直 桜木小学校 守屋美保

 佐束小学校 太田宜子 千浜小学校 兼子裕美

【校内研修】..... 38

 日坂小学校 原田幸子 曾我小学校 北原康宏 和田岡小学校 萩田 歩

 桜が丘中学校 澤瀬 崇 北中学校 鈴木未佳 大須賀中学校 沢田佳史

【重点活動】..... 44

 西郷小学校 羽賀英俊 倉真小学校 三澤佐知与 西中学校 松浦芳志

国語好きな子どもを 育てるために

西山口小学校 金子紋也

本校では、国語を苦手と思う児童が多い傾向にあります。それは算数などの教科と比べて、何を学んだのかはつきりしていないからではないかと考えました。意欲的に活動してもどんな力がついたのか児童自身の自覚が乏しいため、学びの実感はどうしても薄くなりがちです。そこで、国語の授業でも「わかった!」「読んでみたい!」「書いてみたい!」というような声が聞かれる授業にするためにどうしたらよいか、考えてみることにしました。

ねらいを明確にして、共有する

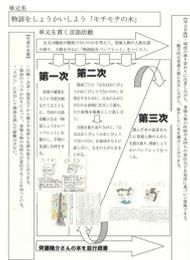
児童の学びの実感が薄いのは、教師によるつきたい力の不明確さが一因として考えられます。そこで、児童の実態と教材の特性を踏まえながら国語科のねらいをより具体的な姿で設定しました。そして、そのねらいを達成するために最適な言語活動も同時に設定しました。この言語活動を行っていくことが教師にとってねらいに迫るための手段であり、児童にとっては目指すべきゴールにもなります。単元の導入でゴールを示すことにより、児童は「○○するために、これを勉強している。」といったように学習の見通しと目的意識を持って第二次の学習に取り

組めるようになりました。

単元を貫く言語活動の設定

しかし、ゴールとなる

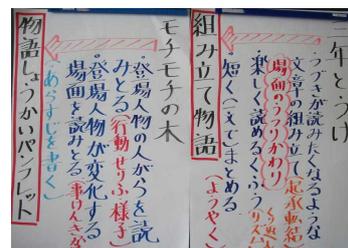
言語活動を設定しても、その活動が毎時間の授業の中で意識されなければ、児童らはゴールを見失い、学習してきたことが生かされません。毎時間の授業で積み重ねてきたことが活用できるような言語活動を設定することが大切だとわかってきました。そこで、単元を三つに分け、第一次では学習の見通しを持ち、第二次では教材を通して、必要な力をつけ、第三次にはその力を活用するという単元モデルを構想しました。



そして、単元の大部分を占める第二次の言語活動が第三次の言語活動と直結するようにし、単元を通して同じ言語活動を行っていくるようにしました。三年生「モチモチの木」では、登場人物を中心とした「物語紹介パンフレット」を書くために、「登場人物の人物が読み取っていくことにしました。「豆太は臆病か臆病でないか」という学習課題に対して、子どもたちは根拠となる表現を熱心に探していききました。このような活動を通して、人柄を表す表現に着目して読む力が育っていきます。その力を活用して第三次では自分が選んだ本でも登場人物の人物に注目して作品を読み、意欲的にパンフレットを作っていくことができました。

身につけた力の「見える化」

このように各単元で力をつけてきても、時間の経過とともに学習内容を忘れてしまうこともあります。そこで、児童が身につけた国語の力を掲示物として教室に残しておくことにしました。こうすることで、以前に学習したことを思い出しやすくするだけでなく、「読むこと」の領域の単元同士のつながりを教師も児童も見取ることができ、また、児童らがこれまで積み上げてきた力を見えるようすることは児童の自信にもつながります。学習計画を立てる際にも「前の説明文は三つに分かれていたけど、今度の文章も同じかな?」といったように、以前の学習を元にして主体的な課題も生まれるようになってきました。



国語の力を明確にして

冬のアンケートでは国語科満足度が「よくわかる」54%「わかる」46%という結果になっています。文章の読み方の幅が広がり、細かい表現に着目できる児童が増えたり、書くことに対する抵抗がなくなり、「早く書きたい。」という声も聞かれるようになりました。今後国語好きな子どもたちを育てるような取組を行っていくように思います。

「できた!」「わかった!」
を感じる子

算数科を通して

上内田小学校 雲母政敏

その授業に「できた!」「わかった!」があるのか?

授業に不可欠なもの、そして意外と見逃しがちなことが、実は子どもで「できた!」「わかった!」の有無の確認である。言語活動、目標と評価の一体化…、これらはすべて子どもが授業で「できた!」「わかった!」を実感するための方策であるが、方策のみが独り歩きしている感もある。さらにまとめの段階まで授業が終わらないこともある。しかし話し合いが盛り上がった、よい発言があったなどでよしとされる場合もある。そこで本校の研究では、こうした授業や研修の実態を冷静に見直し、まずまとめの段階まで授業を行い、子どもにどんな力があったのか検証することを通して、子どもが「できた!」「わかった!」という実感をもてたか評価することにした。

板書計画、最高の学習問題
を用意して授業に臨む

板書計画をすることで授業の骨格が明らかになる。また教師間で板書の仕方の共通理解を図り、板書にはどの教科でも学習課題（白枠）学習問題（赤枠）まとめ（青枠）があるようにした。板書が子どもの思考を助け、また授業の流れを表すようにした。さらに板書は画像として残り返りに生かした。

授業の高め合いや深め合い、「わかったか?」「できたか?」に直結する学習問題は、特に吟味する必要がある。学習問題で授業が変わる。併せて子どもの「できた」「わかった」も大きく左右される。よい学習問題の生まれた授業では話し合いも活発に行われ、子どものまとめもすっきり書いており、また逆も然りである。最高の学習問題をしつかり準備して授業に臨むようにした。



算数的活動、話し合いで鋭い疑問や深い理解を

算数科において、机上や頭だけで考えているとは多様な考えも深い理解も生まれない。手

を使い、体を使う算数的活動をたくさん取り入れた。特に図形や数量の分野において、算数的活動は効果を上げた。

話し合いもまずは隣同士で、次に周りの人、グループなど、「わからない」「なぜ」が素直に言える雰囲気にするためにも、形態を変えて取り組んだ。

また、ICTの利用も子どもの意欲増進や理解に効果があった。中でも実物投影机からの提示や操作は子どもが自ら進んで説明をする言語活動も活性化した。



まとめ、授業のラストシーンをどう迎えるか?

映画のラストシーン同様、授業もラストシーンやゴールはいちばん大切かもしれない。算数では練習問題での確認やまとめ、感想を書く活動があるが、まとめは板書を写す段階から、キーワードを決めて自分で書かせ、徐々に子ども自身がまとめを書けるようにしていった。まとめを書くこと自体が「できた」「わかった」の理解の度合いを表し、評価にもつながった。



「学び合い高め合う授業づくり」

を目指した六年生の国語の授業

城北小学校 近藤奏子

本校では「学び合い高め合う授業づくり」を研究主題として研修に取り組んでいます。子どもが自分の考えを表現し、他とかかわり合う中で、さらに考えを深めたり、確かにしたりしながら、学ぶ楽しさを実感できる授業づくりを心がけてきました。

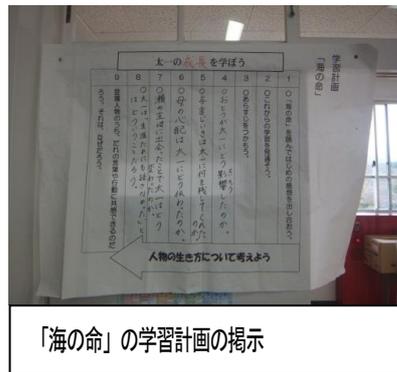
本年度受け持った六年生の児童は、多くの文章情報を捉えることが苦手という実態がありました。そこで、国語を学年の研修の窓口として、「カレライース」「やまなし」「海の命」の三つの物語文を通して、子どもたちの文章を捉える力、読み取る力を高めていきたいと思います。

視点① 夢中になって学ぶ学習問題の設定

どの教材も長文のため、視点を設けながら、あらすじをつかむ活動から始めました。「カレライース」では8つの視点①時②場所③登場人物④中心人物⑤事件⑥大

きく変わったこと⑦人物相関図⑧物語を一文で表現）で考えることにより、物語全体の把握ができました。

次に単元計画を子どもたちと話し合いながら作成し教室に掲示することで、子どもがそれぞれに見通しを持ちながら、学習を進めることができました。



視点② 他と交流する中で自己の考えを深めたり高めたりする「学び合い」の実現

自分の考えを深めたり、高めたりするために、既習事項を活かすことを手立てとしました。

「やまなし」では、前時までの学習内容が次の学習へ繋がるように、一枚のワークシートを用いて学習を進めました。教材の背景に隠れた、宮沢賢治の生き方や考え方に立ち戻りながら読みを深めていくことができました。

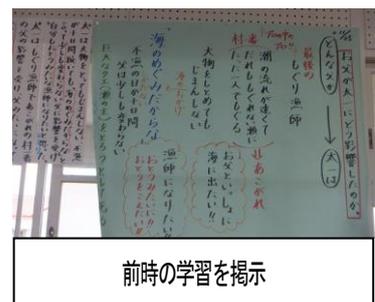
さらに、一斉で学習したことを模造紙にまとめ、

掲示しました。自分の学習の足跡だけでなく皆で考えた足跡の確認ができ、学習の内容を次の学習にスムーズにつなげることができました。

視点③ 確かな学力としての学ぶ意欲や関心が高まり、基礎・基本を確実に定着できる授業づくり

学習の振り返りを一文で表す活動を取り入れました。考えたことを一文で表すことで作文力や要約する力が高まり、子どもの理解の様子を把握することができました。

以上の三つの取り組みにより、より深い学び合いを行うことができました。しかし、一部の子どもだけでの発言で授業が進んだこともあり、全体での練り合い、学び合いはまだ不十分な面もありました。今後は、子どもたち一人一人の考えを、よりの確に把握し、その考えを繋ぎ合わせていくことを課題としていきたいと考えます。そして、さらなる「学び合い、高め合う授業」をめざしていきたいと思えます。



「考えてみたい・ やってみよう」

を引き出す授業 ～一年算数「何番目」～

第一小学校 岡村 梓

「小学校の勉強っておもしろい!」「もっと勉強したい!」小学校一年生の子どもたちがそんな気持ちになる授業をつくっていきたいと思いました。四十五分間の授業に、子どもたちが熱中して向かえるようにするために立ち、子どもたちの気持ちに寄り添って授業を作っていました。

何を考えるのかをはっきりと

算数の「何番目」の学習では、「ケーキ屋さんを開こう」という学習を行いました。子どもたちが大好きなケーキを題材とすることで、「やってみよう!」の気持ちを引き出したと考えました。私が黒板のシヨークースにいろいろなケーキを並



べ、「さあ、みんなが食べたいケーキはどれ?」と聞くと、「はい!白いケーキ!」「わたしはチョコケーキ!」と子どもたちは自分の食べたいケーキを必死で伝えようとしていました。そのうち、「先生、ぼくケーキの名前がわからないから前に出て指をさしてもいい?」と聞く子どもができました。さあ、ここからが本題です。「今日は位置を表す言葉を使ってケーキが買えるようになろうね。」と学習の目当てを提示しました。子どもたちは、「位置を言ってケーキが買えるようになります!」と、目当てを意識しました。

視覚的な工夫

しかし、「どうやって位置を表すか」が問題です。

子どもたちは今までに学習した「上から○番目、右から何番目」などの知識を活用して、いろいろな考えを出しました。「うーんと、上から二番目のケーキ!」「それだけじゃわかんないよ。私は下から三番目で右から一番目のケーキ!」「それならケーキの場所がわかるね。」と、子どもたちは自分のお目当てのケーキの位置を示す大切



な言葉を、見つけていきました。そして、一方向からの位置を表す言葉だけではケーキを絞り込めないことに気づきました。そこで、どの子もケーキの位置を正しく言えるように、スズランテープを使いました。「上下」「左右」二色のテープが重なった所に欲しいケーキがあることを示しました。視覚的な工夫をしたことにより、「テープは二本ないとケーキが買えない。」と、子どもたちは二方向からケーキの位置を意識しました。

仲間と学んだことを活用する

一人一人がお道具箱をシヨークースにして、そこにケーキを並べました。ケーキ屋さんとお客さんになり、ケーキの買い合いっこです。子どもたちは、位置を表す言葉を正しく使えば自分の欲しいケーキをすぐにとつてもらえると、その良さを実感しました。一つのケーキの位置を表すのにも、いくつかの言い方があることに気づきました。

仲間と交流しながら学ぶことで「考えてみたい・やってみよう授業」になりました。



だれにもわかりやすい授業づくり

～五年理科「もの溶け方」～

第一小学校 大須賀勇太

「実験は好きだけど、考えるのは苦手」というAさん。このようなAさんに実験のおもしろさを味わわせつつ「なぜ、そうなるのか」という疑問をもとに、追究することの楽しさを味わわせたいと考えた。

疑問を大切に学習の見通しを

子どもたちは、普段何気なく「溶ける」という事象に接している。そこで、第一時では、溶ける様子をじっくりと観察する時間を大切にしたい。ここでは、透明な一メートルの長さのパイプを用意し、その中に塩を溶かし観察した。Aさんは、「うわあ、塩の粒が透明の糸を引いて消えていく。」と驚きの声をあげていた。そして、「もっと溶かしてみたい。」という思いを強くしていった。



私は、Aさんの思いを学習問題の一つとして取り上げようと考えた。

ここでは、一人一人がもった疑問を解決するには、どのような実験をすればよいかを考える場面も設定した。「重さを量ってどうなったか調べたい。」「水を蒸発させて様子を観察したい。」など、子どもたちなりの思いが次々と出された。

私は、子どもたちの疑問をもとに、以後の学習計画を立てていった。疑問を大切にすることで、見通しをもった学習を展開したいと考えたのである。

何を考えればいいのか焦点化

子どもたちの疑問を科学的な思考力に高めるには、学習問題が重要となる。本校では、この学習問題を焦点化する場面を大切にしている。

Aさんの「もっと溶かしてみたい。」という思いを「塩は、いくらでも溶けるのだろうか。」という学習問題として取り上げた。Aさんの思考に添いつつ、一定の水に溶け



る塩の量に着目させることで、科学的に思考する姿を願ったのである。Aさんは、このことで、溶けるといふ事象そのものに目を向けるだけでなく、一定の水に溶ける塩の量についても追究を深めていった。

モデル図で視覚化

考えるのが苦手というAさんにどのような力をつけていくか。私は、「溶ける」という目に見えにくい事象を目に見える事象に置き換えることで、きまりを見つけ出し、楽しく味わわせたいと考えた。それが、モデル図による視覚化である。

Aさんや子どもたちからは、「容器の中が、ぱんぱん」「ぎゅうぎゅう」といった言葉が飛び出してきた。Aさんは、実験の結果をノートに表したり図や言葉で表現したりする楽しさを感じ、意欲的に話し合いに参加する場面を増やしていった。

学びのユニバーサルデザイン

本校では、「学びのユニバーサルデザイン」による授業改善を進めている。今後も、一人一人の意欲を引き出し、だれにとってもわかりやすい授業づくりに取り組んでいきたい。



小グループ学習で「みんながみんな」でわかる授業」づくり

第二小学校 田中 孝弘

「『自分の意見を伝える』って言ってもさ……。」

四月当初、私の学級では、周囲が自分の考えをどう思うのかが気になってしまいう子が見られました。子どもたちに発表を促すと、「今さら私の意見を聞いてくれるかな……。」といった返事。自分の意見に自信がもてなくなっているというのです。

授業における「意見を伝え合う活動」は、自分の考えを広げたり深めたりする上でとても重要です。また、自分の考えを受け入れてもらう経験を繰り返し積むことで自分の考えに自信がもてるようになります。意見を伝えることに慣れ、学習への自信をもたせるために、「みんながみんな」でわかる授業」を目指し、小グループでの学習方法を工夫しました。

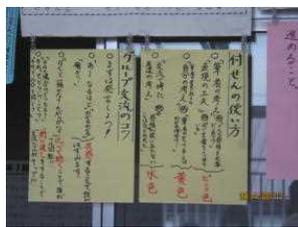
みんなが考えた「筆者が伝えたかったところ」を主体性

まず、意見を伝えることを中心にした活動を意図的に授業の中に設定しました。国語「感情／生き物はつながりの中に」では、「筆者が

この文章で伝えたかったところ」について、意見を付せん紙に書き、話し合いで考えが深まったらワークシートの「納得ボックス」に貼るようにはしました。これにより、「○○さんは、どこで困っているの？」といったやりとりが生まれ、自然と自分の考えを説明する時間が生まれました。さらに、「相づちを打つ」などの「グループ交流のコツ」を提示することで、話し合いをよりよくしようという意識することができました。こうした取組みを継続することで、夏休み前には、学級に「意見を伝えたり受け入れたりするのがあたりまえ」という雰囲気をつくることができました。



納得ボックス



グループ交流のコツ

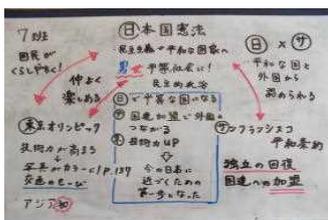
「みんなのおかげで『つながり』がわかった！」を協調性

さらに、グループ学習に必然性をもたせるために、グループで知恵を出し合って考える課題を与えるようにしました。社会科「新しい世の幕開け」では、三つのキーワードから

幕末から明治初期にかけての人々の生活や文化の変化についてまとめました。まとめる過程で、積極的に疑問を伝えて解決しようとする姿や、「それってどういうこと？」と確認しながら話し合い活動を進める姿が見られました。さらに、他のグループとの交流も取り入れることで説明の必要が生まれ、より切実感のある話し合い活動になりました。事後アンケートで、「みんなのおかげで学んだことがつながった」と答えた子どもが多く、グループ活動の良さを実感することができました。

「自己表現」が学級の宝

十二月。「学級のじまん」を話し合った際に、「みんながみんな」でわかる授業」を目指したことで、みんなが意見を言うようになったことが「みんな」と考える子が一番多くなりました。「自己表現」が学級の宝になったと実感した瞬間でした。



社会「戦後の復興」より



グループ学習の様子

学び合いを楽しむ

子どもの育成

「わかった」「わかってもらえた」を実感できる
国語科の授業づくり

原谷小学校 溝垣 千春

学び合いを楽しむ 子どもを育てるために

本校では、子どもの学びの実感を積み重ねるため、研修を進めてきた。特に我が校のものがたりにも掲げた第二の矢である、「力のつく授業への転換」を意識して取り組んできた。

六年生の子どもたちは、自分の思いを友達に伝えたいと感じている子が多く、授業での発言は活発である。しかし、「書くこと」によってわかりやすく伝えること、友達の考えに興味を持って聞き、受け入れることに課題があった。そこで、次の三つの力を高めていけば、学び合いを楽しむことができる考えた。

一 的確に考えを書く・話す

頭に浮かんだまま多く話すことから、要点をまとめて伝えるようにするために、書く力・話す力のスキルアップを目指した。

毎日の日記は条件作文を書くようにし、決

まったテーマに沿って、段落構成やキーワード、字数などの条件を満たす作文に取り組ませた。文章にする題材を見つける視点が広がり、書くことに抵抗がなくなった。

帰りの会のプラスワン発表では、「長い一文より短い三文に」を伝えたらだら話さず端的に伝えることよさを感させた。

また、国語『やまなし』では、視点を絞って書く活動を取り入れた。自分が読んだ宮沢賢治作品について、賢治の考え方や生き方を伝える帯を作る言語活動を組んだ。帯に書くことは①おも

なあらずじ②賢治の人生観がわかる言葉③帯のタイトルの三つとした。思いが伝わる言葉を吟味する言語活動となり、効果的だった。

二 比べながら聞く

友達の発言に対して、自分の考えと比べながら聞くことを意識させてきた。

『感情』『生き物はつながりの中に』で、筆者の考えと自分のとを比べて考える方法を学習した。「同じ」「共感」「少し違う」「疑問」「反対」などの観点



で比べながら聞くように声をかけた。また、友達の意見はみんなでも共有しようという雰囲気づくりに努めた。

三 考えの深まりが実感できる

子どもがゴールを見通せる授業を目指した。単元の最初に言語活動のゴールを示し、単元を貫く学習課題を共有した。目的をもって学習を進めることができ、子どもの意欲が高まった。

『鳥獣戯画を読む』の学習で、絵巻物を見る視点と、多様な表現方法を学習した後、『この絵、私はこう見る』では、学習事項を活用して絵を評価することができた。単元の初めと終わりで比べると、表現に使える言葉が広がり、文章にも膨らみが出た。それをノート指導で価値付け、個々の実感につなげた。

さらに授業のまとめの時間を確保し、振り返りが充実するように心がけた。本時の学習でキーワードとなる言葉を使って書かせたり、自分の考えが変わるきっかけとなった発言を書かせたりした。

今後も、学び合いを楽しみ授業づくり、力のつく授業づくりを目指したい。



進んで学ぶ子の 育成を目指して

掛川市立中小学校 中根 明美
増田七奈子

「学力をつけたい」

子どもたちに「学力」をつけたい。これが、ここ数年の教職員の切なる願いです。子どもたち一人一人が、「疑問を解決したい」「やってみよう」と目を輝かせて学習に取り組み、「わかったぞ」「できたぞ」という成就感や満足感を体験することこそが、学ぶ喜びとなつて次の意欲につながり、真の「学力」がついていきます。そのような、進んで学ぶ子を育てるために、二つのことを工夫して授業を行っています。

一つめは、学習の土台になる聞き方・話し方のレベルアップです。

二つめは、単元構想の工夫です。子どもたちが「やってみよう」と飛びついてくるような仕掛けが隠れている単元構想。単元が終わったら、僕たちはこんなことができるようになるんだ」というゴールが子どもたちにも見える単元構想を目指しています。

「聞き方・話し方のレベル」

温かい聞き方	わかりやすい話し方
1 静かに聞く。	1 返事をする。
2 最後まで聞く。	2 聞いている人に聞こえる声の大きさを話す。
3 話す人の方を見て聞く。	3 友達の方を見て話す。
4 うなずきながら聞く。	4 最後までしっかりと話す。
5 反応しながら聞く。	5 友達にわかりやすく話す。
6 比べながら聞く。	6 友達の考えにつなげて話す。

中小学校では、全校で統一したレベルを設けました。今、自分たちはどのレベルまできているのか、目指すレベルはどこなのかを常に意識させるようにしています。

聞き方・話し方のレベルアップを進めていくことで、「うなずいて聞いてくれて嬉しかった」「○○君の発表は、前に勉強したことを使っていてわかりやすかった」という声が聞かれました。安心感のある学習環境が生まれてきました。

「単元構想の工夫」

四年生の国語「読んで考えたことを話し合おう」では、「ごんぎつね」を学習しました。ごんの気持ちの変化に気づかせるために、「ごん日記」を書かせることを考えました。



子どもの「ごん日記」を書きました。自分が書

いた「ごん日記」を友達に紹介し合い、場面ごと変化するごんの気持ちを豊かに想像することができました。子どもたちは、全体の場でも意欲的に伝え合いました。そこには、進んで学ぶ姿が見られました。



伝え合う子どもたち

「学力の向上を目指して」

四月、一部の友達のことを聞き、受身になることが多かった子どもたち。安心感のある学習環境が整い、さらに単元構想を工夫することで、進んで学ぶ子になりつつある子どもたち。今後も、進んで学ぶ子を目指して、子どもたちに学力をつけていきたいと思えます。

児童が「楽しい」「やりたい」と言える授業を目指して

大坂小学校 榛葉 貴博

「私の好きな教科は、体育で苦手な教科は国語です。」年度初めの教室で、子どもたちが口々に言いました。子どもらしいなとほほえましく思う一方で、「この子たちに国語や算数が楽しいと言わせたい！」と思ひ、子どもたちが「楽しい」「やりたい」と言える授業をするにはどうしたら良いか考えました。

「安心できる関係作り」

子どもたちが、授業を楽しいと思えるには、安心して、ありのままの自分を出せる関係作りが大切だと考えました。そこで、始めたことは教師も一緒になって遊ぶことです。それも本気で。一緒になって汗を流し、作戦を考え、夢中になって遊びます。そして、遊ぶだけでなく、クラスのルールを子どもたちと一緒に作りました。みんなが決めたルールは必要感のある、守るべきものとなりました。夢中になって遊ぶ友達

の存在とルールに守られる安心感が、笑顔あふれる中にも秩序のある学級の雰囲気醸し出し、一生懸命学び合う集団の土台が出来上がりました。

「授業は教材研究が命」

しかし、いくら人間関係が整ったところで、肝心の授業が魅力あるものにならないければ授業への意欲には繋がりません。そこで、必ず板書計画を書き、つけたい力や学習活動を、子どもの実態と照らし合わせて、精選していくことにしました。いつ、どこに、何を板書するか、これだけは伝えたい、ここで笑わせたい、そのためにどんな教具が必要か、板書計画を書くことで、授業の全体像がはっきりとしました。教師自身にも余裕が生まれ、より多くの子どもの考えや言動を価値づけていくことができるようになりました。このことが子ども



もの安心感や意欲に繋がって活発な授業が行えるようになりました。

「できた」「わかった」を実感させる

子どもたちが授業を楽しいと感じるためには、もう一つ大事な事があります。それは、「できた」という成功体験や「僕ならできる」という自信です。そのために、授業の冒頭で学習内容を共通理解するように心がけました。ゴールがわかることで目的意識を持って学習に取り組めるようになりました。

また、一時間の学習内容をワーク一枚にまとめ、一時間の学習が一目でわかるようにしました。完成したワークシートを貼りためたノートの厚みが増えるように、子どもたちの自信も高まっていきました。

「最高の褒美」

「勉強って楽しいと言わせたい。」から出発した一年間。アンケートでは「学校が楽しい」と答えた理由に、記述式にもかかわらず半数の子どもが「授業が楽しいから」「みんなと勉強できるから」と答え、「授業の内容はわかりますか」という質問に全員が「わかる」と答えました。にこにこ主体的に学習に取り組む子どもたちに囲まれて、毎日が楽しくて仕方ありません。

「できるかな」から「できそうだ」 そして「できた」を 実感できる子の育成を目指して

大坂小学校 大石 香奈江

誰でも、はじめてやることには不安を感じるものです。学校生活は毎日が始めての連続で、子ども達は「何をするのかな」とわくわくしたり、「できるかな」と不安を感じたりしています。不安を「できそうだ」に変えることができれば、「できた」につながるのではないかと考えました。最初のわくわくする気持ちを大切に、授業で子ども達が「できた！」と感じられるようにするために、安心して学習できる授業を意識して行いました。

国語の『大造じいさんとガン』では、ゴールを「自分の選んだ本を手にとってもらえるようなショーウィンドウを作ろう」にしました。一時間に一つの視点で本文を読み、考えを書いてショーウィンドウの一部にしました。



はじめに、「ゴールを知る

やることにはつきりすることで安心して学習できる子もいます。

そこで、はじめに教師が作ったショーウィンドウを見せ、ショーウィンドウにはどんなよさがあるのかを出し合いました。そして、この単元で何がわかればよいのかを整理し、学習計画を子どもと一緒に立てました。見通しがもてると、子どもたちは、「自分でも作ってみたい」と意欲をもち始めました。

ワークシートの工夫

しかしまだ、「書くことがたくさんだな」と書くことへの不安は残っていました。

そこで、学習したことがショーウィンドウの一部になるようにワークシートに書き、毎時間貯めていくことにしました。また、テーマによってワークシートの色を分け、罫線の太さも変えて自分に合ったものを選べるようにしました。すると、書くことが苦手な子どもも、「このくらいなら書けそう」「人物の気持ちをもっと書きたい」と、前向きに取り組めるようになりました。



「今日できたから、次もできそうだ」「あと一つで完成だ」……授業が進むごとに、子どもたちはショーウィンドウの完成が楽しみになっていきました。

「できた」は次の「やってみよう」へ

完成したショーウィンドウを交換して読み合いました。今までに読んだことのない本はもちろん、読んだことのある本も自分とは違う見方をしていることに気づき、「読んでみたい」という思いを持って進んで読書する子も増えました。さらには「早く自分のを作りたい」と並行読書する本もどんどん選びました。二時間はかかるだろうと予想していた自分のショーウィンドウ作りを、一時間もかからずに書き終えた子ども達はとても満足げでした。

図書館に日替わりで全員の作品を飾り、全校の友達に読んでもらうようにしました。ショーウィンドウ作りを通して物語を読む視点も増えました。ほんの少し工夫することで安心し、意欲的に学習できるとわかりました。これからも、子ども達が安心して取り組めるような授業を行っていかうと思います。



国語科

「読むことの楽しさ」

千浜小学校 佐藤真琴

物語が見渡せる工夫

くぶつ切りだと作品のつながりに

気づかないく

物語の全体を捉える工夫として、二年生の物語教材「スイミー」と「お手紙」で、挿絵を並びかえる活動を行った。黒板に挿絵をバラバラに並べておき、子どもたちがお話の順に並びかえるというものである。

この時、挿絵を小さくしたカードを各自に配り、子どもたちが自分で活動できるようにした。手元にあるカードを、ストーリーを思い出しながら机上で並びかえ、物語の全体をつかんでいった。

二年生の物語文の二教材とも、作者が文章を書き、挿絵も描いているという特色をもっている。そのため、挿絵の中には、物語の大事なキーワードが隠されている。

Rさんは、「スイミー」の最後の場面の挿絵に描かれている大きな魚のしっぽに気づき、

「この場面は、スイミーたちが、大きな魚を追い出した場面。」と説明した。

「お手紙」では、初めと終わりが同じ場面

で描かれているため、どちらが初めか終わりがわかりにくい。支援を要するTさんは、登場人物の目に着目して、「初めの場面は悲しい目をしているよ。終わりの場面はうれしそう。」と説明した。

この発言をきっかけに、「ふたりともかなしい気分だったのが、どうして、ふたりとも、とてもしあわせな気もちにかわっていったのか？」という単元を貫く学習問題ができあがった。

低学年の子どもたちにとって、挿絵の並びかえは、物語の全体をとらえるのに、大変有効であることがわかった。



題名がもつ大切さに気づく

題名には、作者や筆者の願いが込められている。物語だったら、主人公の名前だったり、説明文だったら、そこに描かれている事柄だったりする。

題名の「お手紙」は、がまくんとかえるく

んの「ふたり」をつなぐ大切なものである。主題は、「二人の心の通い合い」である。

前述の学習問題の答えが、「がまくんが今までもらったことのない手紙を、かえるくんからもらったから、幸せな気持ちになった。」と考えている子どもたちに、かえるくんが、がまくんのために書いた手紙を提示し、そこに書かれている「親愛」、「親友」という言葉に着目させた。

C「かえるくんは、がまくんが喜んでくれたから、がまくんも、かえるくんも幸せだと思う。」

T「ふたりともなんだね。」

C「それが親友だよ。自分のことじゃなくても。」

C「親友だから、わかり合っていて…ふたりとも…。」

T「心がつながっているということ？」

C「そう、心がつながっている。」

C「通じ合っている。」

がまくんの「驚き」から「ああ。」と言葉にならない感動へ、そして「幸せな気持ち」へと、初めの場面と終わりの場面を比べることにより、「何が変わったのか。どうして変わったのか。」を理解し、二人をつなぐ「お手紙」の重要性に気づいていった。

説明文「たんぼのちえ」では、「たんぼのちえってなあに？」と題名をもとに、たんぼのちえを読み進めていった。また、「どぶつ園のじゅうい」では、「どぶつ園の

じゆういさんの仕事ってなあに？」と仕事を探っていた。

このように、題名は、自然に子どもたちの問いになっていった。

読み方を学ぶ

物語文では、「登場人物はだれか、いつ、どこで、どんなことが起こったか。」という基本設定を捉えられるようにした。

説明文では、問いの投げかけから、時間や事柄の順序を考えながら、説明、答えと、「はじめ」、「中」、「おわり」の三部構成や、そのままとまりに気をつけて、学習した。

これは、中学年や高学年に向けて、自分で読み進めるための大切な読み方であると考え

並行読書の効果

『ふたりシリーズ』の『なくしたボタン』のお話で、がまくんがくれたジャケットを『お手紙』の中で、かえるくんが着ているよ。」「たんぼぼのちえを見つけたから、『○○のちえ図鑑』を作ってみたいなあ。」「じゆういさんの仕事を読んだから、『自分が将来やりたい仕事』を調べよう。」など、並行読書を行うことにより、話の関連性に気づいたり、読むことの楽しさがわかったり、他の活動へ広がり、発展していった。

そういう時の子どもたちは、意欲的で主体的に学習を進めていった。

学習したことを発信する

「どうぶつ園のしごと」を読み、「自分の将来なりたい仕事」を紹介し合ったり、一年生の参観会の折に、保護者に見てもらったりした。

「お手紙」でも、登場人物像や心情のわかる表現を学んだ子どもたちは、具体的な心情をペーササートで表現する「ペーササート劇」や、「お手紙で友だちのよさを知らせよう」の活動へとつなげていった。

書くことの楽しさ

「スイミー」や「お手紙」での、最後にお話の「後話」をつくる活動を行った。

子どもたちは、作者のレオレオニやアーノルドローベルになったつもりで、その後のお話を想像してつくっていった。書きぶりも、しぜんに、その作者のようになり、ハッピーエンドでお話を締めくくった。

○それから、スイミーたちは、たのしくくらしした。みんななかよく。そして、いつも元気に。もうニどと、大きな魚は、来なくなった。(スイミー)

○「お手紙、ありがとう。人生はつのお手紙だ。大切にすね。」がまくんが言いました。「これからも、ずっといっしょにいようね。」かえるくんが言いました。ふたりは、さらにしあわせになりました。(お手紙)

このように、その子ならではのお話ができあがった。



実践を通して

・教師自身が教材研究でしつかりとした読みをもつことが大切である。学習者である子どもたちと作品をどうつなげてやるかを考える

と、「読むこと」の楽しさが見えてくる。
・同じ教材を行っても、児童によつて反応がちがいが、授業がちがってくる。だから授業はおもしろい。それは、一人一人の思いや考えがちがいが、そこに個々が絡み合つて、授業が構成されるからである。

「自分はこう思う。自分はこう考える。」と言える子どもを、これからも育てていきたい。そして、子どもといっしょに、その作品を読み味わっていきたいと思う。

・読めない子にも、探さずにはいられない「しかけ」をつくってやると、考え始めることがわかってきた。

みんなが主役！楽しく学ぼう 〜認め合い・自信をつけよう〜

掛川市立横須賀小学校 藤田真智子

四月の授業開きで感じたこと、それは「自分の意見に自信がない子どもが多い」ということだった。授業を創るのは子どもたちである。一人一人が授業で主役になり、わかったと自信を持てるように、次の点に心がけて実践をしてきた。

【自分の意見に自信を】

自分の意見に自信をもつには周りから認められることが大事だと考える。自信をつける手立てとして、付箋の活用、相談タイムの設定を主に行った。

①付箋の活用

子どもの意見を読み、その内容で付箋の色を分けて貼り、良い意見は授業の導入などで紹介をした。ノートを返すと付箋の色を確認し、喜ぶ姿が見られた。また、導入で紹介される友達の意見を聞いて、良さを認め、その良さを自分の考え作りに生かす子どもも多くなった。

②相談タイムの設定

問題提示した直後、考え作りをした後など、隣の人・班の人と意見交流する場を多く設定した。意見交流で大切なのは、どの意見も認めることである。相談タイムを行うことで、友達から学ぶ良さを感ずる子どもが増え、交流を

積極的に行うようになってきた。

【聞き手が話し手を育てる】

自分の意見に自信を持ってでも発表した時に、反応がなければ発表をした気持ちは減ってしまう。そのために次の手立てを行った。

①相談タイムでほめほめ作戦

前述であげた相談タイムの時に、友達の意見を聞いて、コメントや花丸を書き、伝え合うことで、聴く姿勢を育てた。

②聴き方名人になろう

授業の終わりに反応が良かった子を紹介し認めた。また、発表した人が「〇さんどうですか」と聞くことで、反応を促すと共に聞くことの大切さを感じさせた。

友達の意見に興味をもつて聞く子どもが増えてきた。

また、友達の意見を聞いて「気づかなかった」「わかりやすい」など思ったことをつぶやく子どももいて、聞く姿勢がよくなってきた。



【疑問をみんなで解決しよう】

聞いてくれるという安心感から発表やつぶやきが増え、子どもから疑問を出し、みんな

で解決していくための土台ができた。疑問を出すためには、『比べて考える』ことが鍵となる。既習事項、友達との考え等と比

べ、あれつと違いを感じる手立てが必要である。

課題に対する意見を発表する時には、違う意見・間違った意見も取り上げ、その違いに気付くようににした。



既習事項と比べるために、導入で前時の学習の復習を行った。また視覚でもわかるように、掲示物を作成し、振り返る手立てとした。

子どもの疑問をみんなで解決した事例を一つ紹介する。算数『三角形』の学習で正三角形、二等辺三角形の書き方を学習した時、一人の子が「ばらばら三角形もコンパスで書けるのかな」と疑問をつぶやいた。この疑問を課題にすると、どの子どもも集中して取り組み、「できた！コンパスを使えばどんな三角形もできるんだ」と達成感に満ちた笑顔を見せた。その日の感想には「〇さんの疑問を解決できて楽しかった」



など学ぶ楽しさを感じていた。子どもの疑問は探究心の原動力になると実感した。

今後も友達の意見を認め合い、自信をもつて授業に参加し、一人一人が主役となる授業を創っていききたい。

自分の成長を感じよう 学びの実感のある授業を目指して

横須賀小学校 諸田 智恵

「ぼくは、〇〇の力がついた。」と授業後に、自分の言葉で言える子が、どれくらいクラスにいるだろう。授業に参加すれば、その問題を解くことができる。しかし、できるようになったことを、「自分の力」としてはつきりと自覚し、喜びとして感じる子は少ないように思う。学ぶことの楽しさを多くは感じていない子や、学習に対して自信が無い子は次への学習の意欲を高められない。だからこそ、自分の成長を実感できるような授業やクラス作りがしたいと考え、実践してきた。

【みんなで疑問を解決しよう！】

算数の授業では、課題から学習問題への流れを特に意識して構成した。「この続きがわからない。」や「ここで困っている。」といった小さなつぶやきを逃さないようにし、個人の問題をクラス全体へ広めていった。「ここが、今日の解決するところだ。」と全員で共通理解することによって、「これが解決できれば、成長できる。」と意識させるようにした。

【三人で学びを共有】

三年ほど前から、交流活動の人数を三

人にして「三人組活動」を実践してきた。二人よりも多くの意見を交流させることができ、四人よりもお互いの意見をじっくり聞くことができる。時間は六分で区切り、どのように伝え合うかの指示を出してから取り組ませている。



この三人組の意図は、授業によって変わってくる。「お互いの共通点の確認」「悩んでいる児童へアドバイス」「多くの考えを知る」などがある。今までの実践から、それぞれの授業に合わせて、目的をはっきりさせて仕組んでいかないと、効果が薄れるとわかった。また、三人のメンバーも意図的に組んでいき、一定の期間、固定して使っていくといい。そうすることでお互いの考え方を理解しやすくなったり、話すのが苦手な子も抵抗無く取り組むことができている。慣れてくると、ノートを相手に向けて見せて話したり、書いていない子に教えたりするような姿が見られ、スムーズに進むグループが多くなった。

また、考え作りができなかった児童は、友達の見聞を聞いて、ひらめき、ノートを書き出すようなことも多い。考え作りができないまま集団への追究へ進むよりも、三人組の話し合いを経た方が、「わ

かった！」という実感が多く得られる。

【まとめは丁寧・確実に】

そして、まとめの時間は大切にしたい。個人の学びを振り返り、本当に自分のもの(力)になっているかどうかを教師が見極めるのは、まとめや練習問題の時間であるからだ。文でまとめるときには、書き始めを統一したり、単元の最後には「〇〇の力がついた」と書くようにしたりした。書いたものは見取りを確実に作り、次の授業につなげたり、コメントを添えて、励みになるようにしていった。



- ①問題をはっきりさせること
- ②全員が自分の意見を持つための工夫
- ③まとめを丁寧に行うこと

これらにより、授業を通して、「〇〇ができた。」「〇〇がわかった。」という実感をはっきりと持つことができるようになった。もちろん、声かけや定着の確認なども大切である。しかし、まずは①②③を常に土台として意識して授業実践を積み上げていくことによって、子どもたちの「成長」も積みあがっていくと考えている。

これからも、子どもが自信をもって「ぼくは、〇〇の力がついた！」という声が聞けるような授業づくりに努めたい。

考えたくなくなる授業 伝えたくなくなる授業

掛川市立栄川中学校 岡村直哉

中学校数学では、生徒の習熟度に差があり、「どうせ、私はやってもわからない。」と、課題に取り組み前に意欲をなくしてしまう場面があります。

しかし、五十分間の授業の最後には「頑張ったよかったです。」や「私にもできました。」と思えるような授業を作りたいと考えました。そこで以下の点に視点を置き、生徒が自主的に活動し表現できる授業を構成していこうと考えました。

- ① 興味が湧くような課題を設定する。
- ② 何を考えればよいのか課題を明確にする。
- ③ 考える時間を確実に確保する。
- ④ 個に応じた支援をする。

課題はインパクト&ズレに

授業の導入部分で生徒が「やってみよう！」と思えるようにするために、課題設定の工夫をしま

した。ICTの活用です。

二乗に比例する関数を利用して自動車の停止距離を求める授業で、導入時に交通事故の動画を提示しました。

映像から「危ない！」や「怖い！」などの感想が出てきました。そこから、事故を防ぐための車間距離を考える授業の開始です。興味をもつことができると、学習したことを利用して取り組む姿が見られました。また、課題は長々と書かずにシンプルにすることで、今日の一時間で考えることをはっきりさせることができましたと思います。

考える時間はたっぷり

次に実践したことは考える時間をたっぷりと取ることです。時間を取ることで、普段は意見や答えをもたずに終わってしまった生徒も自分の

プロジェクト
で投影



意見をもつことができるようになりました。また、その時間の中でつまずいている生徒への助言をすることもできました。

さらに、考える時間の中で生徒同士が教え合う習慣がつかってきました。

授業の中で「わかった！教えてくれてありがとう！」や「わかってくれてよかった。」という体験ができ、一緒になって学ぶ習慣ができてきたと思います。



学んだことを利用してさらなる高みへ

ひとつの課題が解決すると生徒たちはより難易度の高い課題を求めてきます。徐々に難易度を上げること、「私にも解けた！」という体験を多くすることができました。苦勞して解決した時の喜びを味わったり、友達に教えたいという意欲をもったりすることができたと思います。

すべての授業において実践できたわけではありませんが、今後もそのような体験ができる授業を目指していきたいと思えます。

仲間との『学び合い』は 楽しくてしようがない

掛川市立東中学校 太田 静男

みんなきちんと席に座っています。活発に手を挙げて話し合っています。私の授業で生徒たちは、自分の考えをノートに書き、挙手をして発表し、グループでの話し合いも行い、主体的に活動しているように見えます。でも何かが足りない、そうです。生徒に「心の動き」がないのです。

教室中が「わかりたい」「できるようになりたい」という生徒の思いで溢れている授業。それが「心が動く」ということ。生徒全員が動きたくなくなってしまふ『学び合い』の授業、そんな授業を考えました。

最初は「簡単な課題」から

三年生社会科公民「くらしと経済」の授業です。学習課題は、ずばり、「どちらの牛乳を買いますか」です。みんなが牛乳を買う際、日付が古い物と新しい物のどちらを選択するかという問いです。理由もつけて考えます。授業のきっかけとなる最初の課題は、できるだけシンプルで簡単なものがいいです。具体物や写真など、視覚的なものならなおいいです。簡単な課題は、全員を同じ土俵に乗せてくれます。「今日の授業もみんなで考えよう」という雰囲気を作ります。ほら早速、隣近所『学び合い』が始まりました。本校では、

お互いの顔が見え、協力して授業ができるようにコの字型座席となつて居るため、自然と話し合いが始まるのです。「ねえ、どっち」「へえ、そうなんだ」さあ、授業が「動き」出しました。



視覚的な課題提示



すぐに話を始める生徒

「全員がわかる」が目標

「食品の無駄に考慮して、古い牛乳を買う主婦のように、『賢い消費者』は、どんなことに配慮して買物をするのだろうか」

簡単な課題より少し難しい今日の本題。生徒たちに付けた力をイメージして考えられた学習課題です。生徒たちから作り出されることもあれば、私から提示することもあります。この一時間で全員がこの問題の答えを見つけ出し、理解します。「できた」「わかった」と全員が思えることが目標です。『学び合い』では、過程も大事ですが、成果を大事にします。「わかった」と全員が目標を達成し、学びの実感を味わうことが最も大切にしたいです。

生徒同士で『学び合う』

ホワイトボードを囲み、四人での『学び合い』がスタートします。問題が提示されたいきなり小集団活動です。生徒の話したい意欲を逃してはいけません。

「はい、グループになつて私はゴールだけ示し、あとは生徒に任せます。」

「なぜだろう」「こうしたらどうだろう」と教師は生徒が学びたくなる場を設定することに力を注ぎます。一人では気付かなかった新しい視点に気付いたり、質問に対しての根拠を明らかにしたり、道筋を立てて説明したりする必要を生み出したりするよう、生徒同士で学び合う場を設定することが大切なのです。

「エネルギー問題について考えると、地産地消にも繋がるね」「〇〇さんの発見すごい」生徒たちはお互いに交流することで、自分の考えをさらに進めたり深めたりして、学びの実感を積み重ねていきます。一人で学ぶよりも何倍も早い速度で、学びの主体は生徒です。

学びの振り返りを工夫する

一時間の終わりには、学びの振り返りを行います。「わかった」ことをノートに書いてまとめます。生徒自身が今日の授業で獲得した事柄を明確にする時間です。ただ楽しかっただけで終わらせず、「みんながわかって楽しかった」と、生徒自らが学びの足跡を残しつつ、次への意欲に繋げていきます。



WBを囲んでの小集団活動

科学的な思考力を

育てるために

掛川市立東中学校 教諭 田浦 伸

理科という教科の魅力を伝える

「事実に基づいて、論理的に考え、説明する」理科の授業は、このような科学的思考力を育てることだと私は考えています。

理科と言えば、「実験が楽しい」「実験でびっくりする」などといった感想を多く耳にしますが、実験は事実を明らかにするための手段です。ですから「実験がおもしろいから理科が好き」と言う生徒の口から「実験から考えることがおもしろい」と言ってもらえるように、日々努力をしています。今回は中学校1年生「植物の世界」の単元で実践を試みました。

知りたくなる 考えたくなる

(導入の工夫)

まずは植物に興味を持たせることが大切だと思います。考えるためには、考えたいと思わせることが必要です。個人の興味がより高まるように、

導入では校内探訪を行いました。校内に生息し普段から見ている雑草も、じっくり観察するといろいろな発見があります。4人班にひとつのデジタルカメラを配布し、校内に生息する植物のおもしろいところを、一人1枚撮影するように指示しました。花や葉の形、背の高さ、色、生息場所、枝の付き方など、よりおもしろい写真を撮るべく、生徒はそれぞれの視点を持って植物を観察しました。



自分の言葉でまとめ説明し合う

実験や観察から得た事

実に基づいて、意見や考えを自分の言葉でまとめ、自分の言葉で説明します。今回は撮ってきた写真について、どういう点に興味を持ったか、観察を通してどんなことが分かったかを、一人ずつクラス

(学び合いの工夫)



付けたい力を身に付けた生徒の姿

全員の前で説明しました。写真はプロジェクターで大きく表示し、どの位置からもはっきり見えるようにしました。普段の話し合いの活動も活発になるように、理科室だけではなく、教室もコの字型座席にしています。周囲と話し合いやすく、近くの人に聞きやすい環境を整えています。

こうした取組が、生徒の科学的な思考力につながっているか検証するために、アンケートを実施しています。1月に行ったアンケートでは、理科の授業の魅力として、32%の生徒が「実験からいろいろなることが分かること」を選びました。4月入学当初では「実験すること」を選ぶ生徒がほとんどでしたが、実験から考えて分かることに魅力を感じる生徒が増えました。

身近な現象の単元では、光、音などの身近な物理現象について、理由述べて筋道を立てて話し合う姿が見られました。自分の意見を確かめるために、必然的に実験を考える様子が多く見られました。しかし、「実験することが好き」と答える生徒がまだまだ7割以上いるので、科学的に考えることの魅力を、これからも伝えていきたいと思えます。

子どもの思考を高めるための単元構成

西中学校 石川真男

なぜできない？

「何でこんな簡単な問題ができないのだろう」「教えたじゃん」採点中に聞かれる教師の言葉です。授業中の子どもの反応も良いし、手応えもあった。でも、テストでは点数が取れない。「勉強をしっかりとやらない子どもに原因がある」で片付けて良い訳がありません。テストの結果が良いと学習意欲も向上します。できない原因を、子どもたちの思考に寄り添って考えてみましょう。

子どもがつまずくとき

「最近数学が分からなくなってきた」「算数は良くてきたのに」数学は英語と並んで、学年が上がるにつれてテストの点数差が広がる教科です。子どもは数学でつまずくと「数学は生活で使う時があるのか」と考えます。ここで明確な答えが出ないと数学は生活に必要なない教科になってしまう、学習意欲が下が



り、数学嫌いへとなってしまいます。だから、「正の数・負の数」の単元ならば気温や建物の高さなど日常生活に即した題材を使い、学習意義を感じさせながら授業を組み立てます。

比例の学習

比例は子どもがつまずきやすい一つです。例えばドライブで今の速度で進めば一時間後にどの辺りにいるかは比例の考え、目的地に予定時刻に着くには、どの程度の速さで進めばよいかは反比例を使って考えます。しかし、日常生活の中で関数を実感する事は余りありません。関数の考え方は、これから起きる事を分かっている事実から予測する場合や知りたい数値を別の数量に置き換えて考えるときに使います。ですが、事象に潜む関数関係を目で見ることは難しいので、表・式・グラフを使い分かりやすく考えます。これが数学を活用する活動であり、数学のよさを実感できる体験です。だから、比例の単元は「比例の基本」↓「比例の表」↓「比例のグラフ」↓「反比例の基本」↓「反比例の表」↓「反比例のグラフ」↓「比例・反比例の活用」と授業を進めてきました。

子どもの思考を鍛える

しかし、比例・反比例を各々授業で行っているときには理解できるが、最後の「比例・反比例の

活用」になると、問題が比例・反比例のどちらを使つて解くのが判断できない子どもが出てきます。問題には、「これは反比例を使つて解きましょう」なんて書いていません。反比例の学習をしているから多分これは反比例で解けるだろうと、事象に潜む関数関係を意識していない子どもたちです。そこで、比例・反比例を同時進行で行ってみました。関数の関係を式化するときには比例・反比例・その他の関数の三種類を一時間の中で取り上げ、比較しながら授業を進めてみただけです。与えられたものを何も考えずにこなすのではなく、考えることから始める癖をつけました。

手応え

「できた！」問題が解けたとき、思わず言ってしまう子です。比例・反比例の判断テストで60%そこそこの正答率だった問題が教え方を工夫したら七十三%まで上がりました。従来に比べ、最初は歩みが遅い。でも、思考が鍛えられた分、確実に前に進んでいます。子どもの実態に合わせて、教え方を工夫することで「何でこんな簡単な問題ができないのだろう」という教師の言葉が聞かれることは少なくなりました。



多様な見方・考え方を育むために

桜が丘中学校 金田 晋

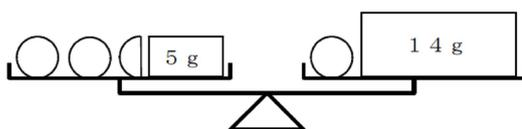
マイナスって何？

中学校へ入学し、それまでの算数が数学へと変わる。算数と数学の違いはいくつもあるが、その第一段階となるのが、「0」だと考える。算数での「0」は量的な「0」を表している。それに対し数学での「0」は、基準としての「0」という意味が追加される。それにより、数学では、それまでの「0」と「0より大きな数」に加え「0より小さな数」が登場することとなる。その結果、四則演算では符号についても考えなければならなくなるのである。

そこで乗法の積の符号について考えた。正の数を使った場合と負の数を使った場合の符号についてそれぞれ考えてみる。正の数をかけた場合は、かけられる数の符号の向きは変わらず、そのままである。それに対し、負の数をかけると、かけられる数の符号の向きが反対になる。この法則を見つけたおかげで、マイナス×マイナス＝プラスと説明することができた。

求め方はいくつかある

一次方程式の導入では、「図のようにつり合っている天秤があります。白玉一個の重さは何gになるか求めましょう。」と、まだ方程式の解き方を学習する前であるにも関わらず発問した。生徒は、つり合っている左右の上皿天秤から、白玉一個の重さを等しく減らし、白玉一個分の重さを6gであると見つけることができた。方法として、白玉一個の重さをxgとして式をつくり、まず、左右の上皿から白玉を一つずつ減らす。次におもりを5gずつ減らす。すると左辺は1.5x、右辺は9となる。ここからxの重さを求める過程がいくつか出ることとなる。



意見交換し、いろいろな

考えがあることを知る

1.5x = 9をxの重さを求める方法として次の方法が挙げられた。一つ目として÷6をしてからxを求め、二つ目としてxを6をかけてから÷6をする。三つ目として2/3をかけて、÷6をする。全く別の方法として、小数をなくすため、白玉半分の重さをxgとする考えも出

された。始めから小数を無くすことを考えたのである。次に自分で考え出したものを「自分の考え」として小集団の中で説明する活動に取り組む。そうすることで自分の考えを深めたり、他人の考えを聞くことで新しい発見をしたりできる。今回の授業では、一つ目の考えと二つ目の考えが、結果として同じであるにも関わらず、互いに相手に分かってもらうことに苦労していた。この活動を通して、自分の考えを深めることの大切さと相手に説明することの大変さを経験することができた。



多様な見方

・考え方をするために

自分一人で多様な見方・考え方をすることは容易ではない。しかし、他人の力を借りることで見方・考えの幅を広げることができ。そのための課題として、まずは「自分の考えをもつ」ことである。そのためには間違いを恐れず、諦めずに粘り強く取り組み、自分の考えをもつことで少しずつではあっても前進するものと考える。

根拠に基づいて表現し 思考力をはぐくむ

城東中学校 大杉鏡康

よりよい授業での学力向上のために

「なぜそう思ったの？」本校では、「根拠に基づいて表現し、思考力をはぐくむ指導の追究」をテーマに、「報徳の教育」を引き継ぎ、表現意欲や探究心にあふれる城東中生の育成を目指した。

研修では「根拠に基づいた考えを持つことと、学習内容をより深く考え、高い次元で主体的に授業に取り組み生徒の割合が増し、思考力が高まる」という仮説を立て、授業改善を図った。

起：まずは職員の意識改革

目指す授業像を共有するために、職員が生徒役になって、模擬授業を行った。これによって、「他の教科ではこのような取り組みがで



きるのではないか」「根拠の定義をもっと明確にしよう」などの様々な意見が出され、職員全員で目指す授業像や課題を明確にすることができた。

承：研修テーマに基づいた授業実践

職員でいくつかのグループをつくり、その中で公開授業を行った。「私は〇〇だと思います。なぜならば」といった発表方法や、「その根拠は？」という補助発問で、生徒の根拠を表現させた。「学習問題に対する答えに根拠をつけて堂々と発表していた」「どの子も根拠のある意見を書いていった」などの感想がよせられるなど、確かな手ごたえを感じることができた。



転：教科の特性の考慮

英語や実技教科では、研修テーマが実践しづらいという課題も見えてきた。「保健体育」で押えるべき根拠とは何か。「英語」の授業での研修テーマを意識した授業展開はどうあるべきか。教科の特性と研修テーマ

の関わりについて全校体制で議論を重ね、各教科の中で「つきたい力」を明らかにする機会となった。

結：収穫と今後に向けて

実践の結果、生徒からの授業評価アンケートで次の3点の成果が確認できた。

①「根拠に基づいて考えを表現する場面があった」が4〜7月は3・9だったのが、9〜12月は4・1に増加した。

②生徒のコメントに「理由をつけて発表する機会が多かった」「美術の自分の自画像の背景に、心情を出せるように考えた」などのよい現れが見られた。

③5つの教科において、「授業がよくわかる」の項目の数字が増加していた。

「平成尊徳」として「自分の意見をわかりやすく人に伝えることができる生徒」に一步近づいたといえる。

教科の特性の考慮など、課題はまだまだある。

しかし職員全員で意識を共有し、城東中の生徒の学力向上のために更に努力を重ねていきたい。



追究活動の工夫で 主体的な活動に！

掛川市立大浜中学校 河合伸昭

授業の実態からスタート

本校では、「落ち着いた態度で、授業に集中できる生徒が多い。」という長所がある一方、「生徒自身が学習に向かって主体的に活動することが少ない。」ということが課題です。それは、教師の説明が多く、生徒自身で課題解決に向かって活動する場面を意図的につくることが不十分だからであると感じました。そこで、今年度は追究活動を工夫していくことで、「いろいろな考えをもった。」「自分の考えをたくさん発表した。」「自分たちで解決した。」など、生徒自身が主体的に追究をする授業となるようにしていこうと考えました。

追究活動の三つの柱

本校の実態を踏まえ、生徒が主体的に授業に臨むことができるように、「追究活動の三つの柱」を立て、授業改善に臨みました。

一つ目は、追究活動の時間を確保することです。「学習問題を十分以内に成立。」を目標にしました。

二つ目は、本時の追究内容を明確にするた

めに、学習問題を赤枠で囲み、板書することです。

三つ目は、学習問題に対して、個の考えをつくる時間を確保することです。追究活動の授業形態として、「個」↓「小グループ（班）」↓「一斉」のパターンをつくってきました。「小グループ」や「一斉」で、主体的な活動とするためには、生徒一人一人がじっくり考える時間が必要であると捉えました。この三つの柱を授業の中で確実にを行うことを意識して、実践しました。

また、個の考えを少人数活動でホワイトボードにまとめ、一斉で示すパターンもつくってきました。追究内容の明確化や自分の考えをもって話し合い活動に入るといふ追究活動の土台を定着することに力を入れてきました。そして、授業の終わりには、確実に本時のまとめを行い、授業における学力向上に努めました。



追究活動が充実しない！

追究活動の時間確保や話し合うための土台はでき、授業がパターン化されてきました。

しかし、少人数での追究活動は、活発な意見交換とは決して言えませんでした。一部の生徒の考えで話し合いが進み、ホワイトボードには、代表者の意見のみが書かれることが

多く、生徒一人一人が主体的になっていないことに気づきました。

個の考えが深くなかったり、時には、何も書かず少人数の活動に入ったりする生徒がいたので、個の考えづくりを強化しようと考えました。

個の考えづくりで時間を確保することに加え、机間指導を大切にしました。生徒がノートに記入したことに對して、誉め、何も書いていない場合は、「間違っていないので、考えを書こう。」などの声かけに重点を置くことで、その後の話し合いで生徒全員が主体的に活動できると考えたからです。



受け身から主体へ

「追究活動の三つの柱」を授業のパターンとして継続することで、生徒の活動が「受け身」から「主体的」へと少しずつ変わっていききました。

理科では、観察や実験は好きだが考察は苦手な生徒が多いです。追究活動の時間が十分にある中で、自分の考えをもって仲間に伝えることが少しずつ楽しくなり、自分からの授業が増えていきました。

今後さらに、主体的な追究活動が活発になることで、学力向上を目指していきたいです。

生徒に付けたい力を

育むために

大須賀中学校 梅田 晃

単元末のステキな自分をイメージ！

英語の授業の魅力って何だろう？それはきっと英語という言語を自由に操れることになることではないでしょうか。外国に行つて、現地の人たちと自由に会話ができる自分を想像すると、なんだかワクワクしてしまいますね。

私は生徒たちにこのワクワク感を常にもってもらいたいと考えています。単元を通して重点的に伸ばす技能は何か、その技能を向上させることでどんなことができるようになるのかを明確にイメージすることで、生徒たちは目的意識（目標）をもって学習に取り組むことができます。例えば、第二学年 Lesson 5・6 の学習を通して身に付けたい力を「話すこと」に関して、「将来の夢についてスピーチすること」としました。このときは、2年生の先生にお願いをして、その先生の将来の夢を英語で語ってもらい、その様子を写した動画を、

単元の始まりに生徒たちに見てもらいました。

生徒たちは、英語科以外の教員が英語で将来の夢を語っている様子に真剣に耳を傾け、「自分たちもこうなれるんだ！」と目を輝かせ、単元の学習をスタートさせたのでした。



目指す姿をイメージさせるための映像

付けたい力に向かった単元構想図

生徒たちに単元末の自分をイメージさせた後に大切なのは、そのイメージに到達するまでの課程（指導の手立て）です。従来の英語の授業は「教科書内容理解」→「文法指導・練習」→「教科書内容理解」のサイクルで行われていたことが多かったように思います。しかし、このやり方では授業で学習することが途切れ途切れになり、系統性が乏しく感じられてしまいます。「将来の夢についてスピーチすること」を目標にした単元では、似た内容を学習する二つの単元を同時に指導しました。最初の六時間で、Lesson 5・6 で学ぶべき内容を

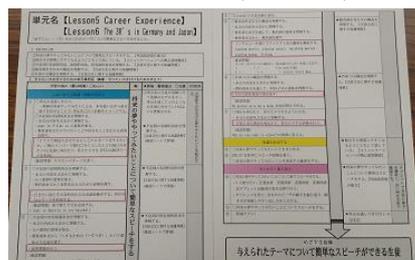
を全て押さえ、その後、将来の夢を考え、三時間の準備を経て、スピーチを全体に披露しました。

準備をする時間を十分確保することで、

英語の苦手な生徒も、単元で学習した不定詞や動名詞を用いて、「将来は世界中を旅行して、たくさんスイーツを食べたい！」などと、自信をもって語ってくれました。

付けたい力を実感

単元末のステキな自分をイメージしながら学習に励み、単元のまとめの活動に取り組んだ生徒たちは、大きな達成感をもつとともに、「英語のリズムに気をつけて音読できるようになった！」「相手の質問に適切に答えられるようになった！」などと、自分たちの力を実感することができています。今後も、付けたい力を明確にした指導の工夫をしていきたいと思えます。



付けたい力を付けるための単元構想図

語彙を豊かに大作戦!

東山口小学校 野口麻子

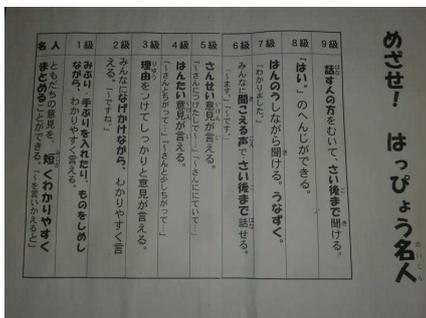
聴き方・話し方

レベルアップ!

我が校では、聴き方話し方のスキルをレベルアップするために「発表名人表」を前面に掲示している。ただ、教師も子どもも意識しなければ、絵に描いた餅になってしまう。

今年は、学年部ごと名人表の取り組み方を話し合った。また、発表名人カードとして期間限定で名人を指して取り組んだ。

前期が終了し、折り返し地点での振り返りとしては、学年に応じて取り組みめたということでもまずまずの成果をあげている。



今月の詩を暗唱しよう!

語彙を豊かにということ、三年前から取り組んでいる今月の詩の暗唱。見やすいところに掲示し、暗唱が合格すれば名前を書いたシールが貼れる。

今年も学習カードを統一し、そこに詩の紙を必ず貼ることにした。また、十月のなかよし集会では、全校群読を呼びかけた。

十月からは、各学級で、毎朝、群読の練習をした。なかよし集会では、全員が揃うように太鼓でテンポをそろえながら、群読をした。みんなの大きな声が体育館に響き渡って、終わったあとには余韻が残った。

暗唱することで、たくさん美しい日本語に出会い、言葉が心に残るものになっていくことを願っている。

読書活動の充実

語彙を豊かにする作戦の一つが読書活動である。東山口小学校では、統一した読書カ-



ドを利用して、カードと一緒に「この本読もう」のリストがつけてある。目標冊数、ページ数、そして必読図書がどの位読めたかを認める見やすいカードである。

また、読書に力を入れるため、年間計画を見直し、年間のめあてに合った読書指導を取り入れている。職員や図書ボランティア・図書委員会による読み聞かせ、読み聞かせバイキング。図書館支援室の協力を得たブックトークなどの活動と合わせて、市立図書館から総合学習や国語に必要な図書の貸し出しをどの学年も頼んでいる。

今年も、担任にも読書の意識を高めてもらうため、読書カードの結果を、カードと共にステージごとに提出してもらっている。図書担当が本の内容から学年相応の読書ができていないか、記録が記入できているかをチェックしアドバイスをしている。

子どもたちに読書の楽しさを感じさせるには、子どもが自分から本を手にとろうと感じる活動を大切にしたい。



子どもの学びを支えるために 「我が家の家庭学習ものがたり」を作ろう

西山口小学校 永井 和典

「『かけがわ学力向上ものがたり』第四章の『家庭のものがたり』を受け、どう具現化するか・・・西山口小内で検討を開始しました。まず、本校ならではの『家庭のものがたり』の意義付けをしよう

今年度の西山口の学校経営方針に「家庭・地域とのパートナーシップを築き、子どもを支える」とあるため、家庭学習は、学校から一方的に与えるものというおさえ方はやめました。そこで、家庭学習の意義を「『家庭と学校のパートナーシップにより、子どもの学びを支える』ためのものがたり」とおさえることにしました。そして、学力向上の取組の柱を、次の二つに設定しました。

- * 「家読（うちどく）」の充実
- * 「家庭学習の手引き」の作成配付

小中学生の学力向上へ 31校が実施

掛川市教育委員会は、授業の見直しだけでなく、小中学生の学力向上を図るため、市内全域ボランティアと連携し31校が策定した実施計画をまとめた「我が家の家庭学習の充実を図るためのものがたり」を発表した。西山口小は朝活動の「声だしタイム」や同市教委は学力を広い意味で捉え、「思考力や問題解決力、意欲」などを重視した「掛川型スキル」を軸に独自の「かけがわ学力向上ものがたり」を策定した。い活性化を目指す。

どんな「家庭学習の手引き」を作ろうか

まず、家庭学習の内容を規定しました。①担任からの宿題（本読み、漢字、計算）②①に加え、高学年は自学にも取り組む③家庭の学習・生活環境の整備④家読、親子読書などの家庭読書⑤親子のふれあい&ノーメディアデー

さらに、これらを一律に学校から事細かく手引きとして示すのではなく、手引きは「各家庭の実情に合わせた取り組み方を相談して決める際の基準や選択肢」としました。こうして作成した手引きを基に各家庭で親子で話し合いながら、各家庭独自の「我が家の家庭学習ものがたり」を書き込

2014年7月8日(水)の静岡新聞にて本校の「家読」の取組が紹介されました。この記事を取組で紹介し、本校の家庭学習ものがたりの取り組み方を保護者に説明しました。



学年	担任	担任の宿題	家庭の学習	家庭の環境	家庭の読書	家庭のふれあい
1年生	担任	算数、国語、英語、生活科、道徳、体育、音楽、保健体育、家庭科、総合	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分
2年生	担任	算数、国語、英語、生活科、道徳、体育、音楽、保健体育、家庭科、総合	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分
3年生	担任	算数、国語、英語、生活科、道徳、体育、音楽、保健体育、家庭科、総合	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分
4年生	担任	算数、国語、英語、生活科、道徳、体育、音楽、保健体育、家庭科、総合	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分
5年生	担任	算数、国語、英語、生活科、道徳、体育、音楽、保健体育、家庭科、総合	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分
6年生	担任	算数、国語、英語、生活科、道徳、体育、音楽、保健体育、家庭科、総合	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分	家庭学習時間10分

みました。完成したカラー版は各家庭に掲示してもらいました。白黒版は担任に提出してもらい、学校も、各家庭で作成された内容を把握しました。

作成したら終わり？継続した活用こそ！
学校提出用の白黒版の裏には、九・十二・二月にふり返りを記入できるカードを印刷しておき、家庭で記入したから学校に提出してもらおうようにしました。
二月には一年間の取組に対するふり返りの言葉が各家庭から寄せられます。それらを糧にして次年度に生かしていきます。

「書く力」を育てるために

城北小学校 杉山吉美

全国学力・学習状況調査の結果から、本校児童の「要点を押さえて書く力」を高めていくことの必要性が明らかとなりました。そこで本校では、授業以外でさらに「書く力」をつけていく場として朝活動の時間を活用し、「金じろうタイム」を設定しました。毎週「継続して取り組む」ことを大切にしていきたいと考えました。

毎週金曜日の朝活は「金じろうタイム」

♪ 骨身を惜しまず仕事にはげみ
夜なべ済まして手習い読書
せわしい中にも撓まず学ぶ
手本は二宮金次郎♪
(「二宮金次郎」の歌)

毎週金曜日の朝七時五十分になると、「二宮金次郎」の歌が流れ、グラウンドを走っていた児童は一斉に教室に向かいます。机の上には金じろうノートの課題を取り組みます。



十分間で完結できる内容を

毎週一回、約十分間でできる活動を各学年の学びづくり部員が中心となつて考えました。実践した内容は、次の通りです。

- ・ 言葉あつめ
 - ・ 視写
 - ・ 「は」「を」「へ」の使い方
 - ・ 主語十述語の文づくり
 - ・ 三文日記
 - 〈二年生〉
 - ・ 視写
 - ・ 理由を表す文づくり（なぜかというところ）
 - ・ 「」の使い方（改行の仕方）
 - ・ 絵を見て文づくり
 - 〈三年生〉
 - ・ 視写
 - ・ 「」の使い方
 - ・ 修飾語の使い方
 - ・ 常体、敬体の使い方
 - 〈四年生〉
 - ・ 視写
 - ・ 常体、敬体の使い方
 - ・ 条件付き短文づくり
 - ・ 要約文
 - ・ 原稿用紙の使い方
 - 〈五年生〉
 - ・ 視写（縦書き、横書き）
 - ・ 条件付き短文づくり
 - 〈六年生〉
 - ・ 視写
 - ・ 条件付き短文づくり
- 書くことに慣れるために、どの学年にも視写を取り入れました。

条件付き短文づくりでは、「もしも」や「わけは」を入れる、順序をあらわす言葉を使う、会話文を入れる、二段落に分ける、などの条件を付けて短文づくりを行いました。その他、児童の実態や学習内容に合わせて課題を設定し取り組んでいきました。

継続して取り組むことで成果が！

視写を継続して行うことにより、子どもたちの書く速さが向上しました。また、「」を正しく使ったり、敬語の使い方や分類の仕方を正しく理解したりするなど、同じ内容を繰り返し取り組むことができるようになってきたことが数多くありました。



文章を書くためのスキルのための学習は、普遍的な内容ではなかなか時間をかけられないので、「金じろうタイム」で行えたことはとても有意義でした。書くことに集中することで、文を書くことに抵抗がなくなつた児童も増えました。

来年度へつづく：

多くの成果があつた「金じろうタイム」ですが、子どもが書いた内容を直す時間の確保、学年間での内容の系統性をどのようにして整えていくか、などの課題もあります。今年度培ったスキルをもとに、さらに文章構成能力を高めるための取り組みも行っていきたいと考えています。

自分の言葉で

伝えることができる

児童を育てるために

原田小学校 田林圭太

「素直で優しく、まじめで、何事にも前向きに取り組むことができるけど、自信がなく、主体性に欠ける子が多いよね。」これが、私が6年担任として感じた本校の児童の姿です。全校児童73名、6年生13名と掛川市内の小規模校の一つである原田小。人数の少なさによる人との交流の希薄さや人間関係の固定化、さらに経験不足など、小規模校ならではの課題を抱えています。そこで、自信をもたせる場を意図的に設定していくことで子どもの自尊心を高めながらその子の良さを発揮させ、自分で考え、判断し、行動できる児童を育てていきたいと考えました。小規模校の良さを生かした原田小学校ならではの教育活動の始まりです。

子ども主体の学び合い

本年度は、子ども自らの問題発見・見通し・問題解決・練り合いを大切にしたい。「子ども主体の学び合い」の実現を目指しました。

始めに「書かせる」活動を通して、自分の考えを言語化することから始めました。次に、その考えを4〜5人の班で話し合い、ホワイトボードにまとめる活動を取り入れました。

班の中で「伝える」ことは、自分の考えたことを整理したり、友達の考えを聞くことで新しい考えを生み出したりするために有効であると考えたからです。また、「分かりやすく伝える」ことを実践する経験を積むこともできます。そして、それをもとに全体での話し合いを行っていききました。

初めは時間がかかりましたが、何回か繰り返すうちに短時間で充実した話し合いができるようになり、全体発表での挙手や発言も増えました。そして「分からないよ。教えて。」「これはさ…。」分からない子が分かる子に質



班で「伝え合う」

問し、分かる子があの手この手で説明する姿は、まさに私が目指した子ども主体の学び合いでした。同時に、それらを支えたのは、13人というスケールメリットの良さを最大限に生かしたきめ細かな声かけと個への支援であったと言えるでしょう。

自信がついた子どもたち

12月にアンケートを取ったところ「授業で勉強したことが分かる」「やる気をもって授業に取り組んでいる」という設問に100%の子どもが「強く思う・そう思う」と答えました。

学習だけでなく、運動会や修学旅行などの行事や学校生活のあらゆる場面で、自ら考え、見通しをもち、計画を立てる場や時間を作っていました。

その結果、「学校は楽しい」「自分で考え行動することができた」という設問でも100%の子どもが「強くそう思う・そう思う」と答えました。

そこからは、自分の考えをもち、自信をもって自分の言葉で発言し、行動していく、成長した子どもの姿が見られました。

「自分に自信」 「学校が自慢」 土方が大好きな子へ

土方小学校 殿岡基弘

出会いを希望に 新芽を芽吹かせる

一年間を安定した学級にするためには、新学年で伸びようとする意欲いっぱいの子も、たちとの出会いを大切にしなければならぬ。学級開きでは、出会いを大切にしつつ、一年後の具体的な姿を示し、子どもたちとイメージを共有した。

また、学年始に重要なものは、児童の実態をつかむことだ。子どもたち実態は次のようであった。

- ・意欲的に学習に取り組み、積極的に発表できる子が多い。
 - ・男女間でも協力して学び、学習集団としての高まりに期待できる。
 - ・国語では誤記、算数では計算ミスが目立ち、基礎的な力が不十分。
 - ・長文の読み取り、論理的な説明などに弱さがある。
- このような実態を元に、学力向上へつなげる手立てを考えた。

意欲継続の楔を放つ

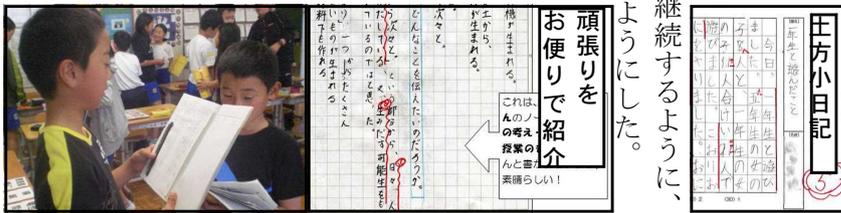
学力向上の手立てとして、次の方法に重点を置いた。

- ・学習ルールの徹底（土方小 学びの約束・ルール）
- ・導入・展開の工夫（学力向上に向けた市の取組）
- ・学習（見通し）黒板の活用（学びのユニバーサルデザイン）
- ・「土方小日記」とノート作り指導で書く力の向上

また、子どもたちの意欲が継続するように、必要に応じて支援の楔を打つようにした。

- ・学級便りで子どももの頑張りを紹介
- ・基礎的・基本的な学習に弱さが見られる子には、個別の支援（ボランテイアによる放課後学習教室）
- ・ノート展を活用して頑張りを紹介
- ・学習では、意図的交流の場を設定し、多様な考え方に触れる

このような支援で、意欲を継続させ、学びを充実させた。



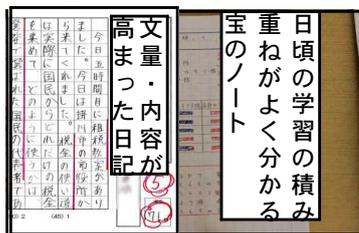
できる自分に自信 高め合う学習集団へ

継続して学ぶことで、（自然と）学力は向上していく。学ぶよさを体感した子は、学びをレベルアップし、より高い学びを求めるようになる。学力向上の手立てを積み重ねてきた結果、次のような成果が見られた。

- ・年度始より学力が定着した。（特に基礎的・基本的な学力に弱さが見られた子が伸びた）
 - ・自分の学習に自信をもち、ノート展では自慢のノートを多数出展した。
 - ・「土方小日記」に書く文量が増え、漢字をより多く使うようになった。
 - ・学習黒板の活用や導入
 - ・展開の工夫により、学習に見通しをもち、主体的に学ぶ学習集団になった。
- 「学校が楽しい」「学習が分かる」などアンケート結果の伸びからも、集団としての高まりが分かる。

学校が自慢に

挨拶を褒められた子が、「挨拶は土方小の自慢です。」と。仲間、地域の人に支えられて学び、自分が高まることを実感したからこそ、言える言葉だ。継続して、土方で学ぶことが自慢になる子を育てていく。



確かな学びを支える 学習の構えづくり

大淵小学校 寺本 健

目と耳と心で聴こう

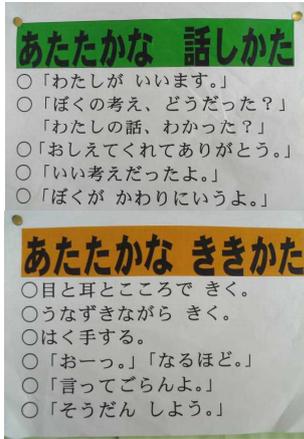
第一ステージ四月。二年生のかわいい子どもたちとの学級開き。教師の話をお聴けない子、話の合間に口を挟む子が気になる。

二日目。

「どんな授業をしたいですか。」と問うてみる。「楽しくて、笑いが出るような授業」「みんなが自分の考えを発表する授業」というような考えが出された。

更に、『四月の取組は「目と耳と心で聴く。」です。どんな聴き方、話し方をすればいいかな。』と続けた。

その問いに対する子どもたちの考えを、下のよう
なまとめ、
掲示した。



温かい反応をしよう

子どもたちは早速「目と耳と心で聴く」ことを意識しながら学習を進めた。発言の前に、皆に呼びかける。自分の方を見てくれているか確認する。それを繰り返すことで、子どもたちは話し手に注目して聴き、聴き手を意識しながら発表できるようになった。

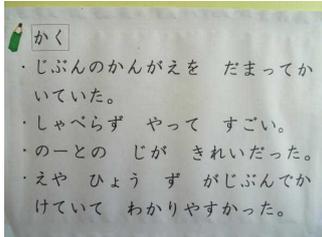
その取組を進めれば進めるほど、発言内容について「分かりやすい」「おーっ。」「すごい。」「といった素直な反応が増えた。それに伴って、自分の考えをあまり発言しなかった子の挙手が増えていった。

我慢作りにチャレンジ

六月。新たな取組を子どもたちに投げかけた。

「六月から七月の取組は『我慢作りにチャレンジしよう』です。どんなことにチャレンジしますか。」

「温かい言葉をもっと言えるようになりたい。」「目と耳と心で聴くことを続けてやっっていく。」などの考えが出た。
そんな中、ある女の子が、「わたしは、



2年生の授業を参観した1年生の感想

字を雑に書きちゃうことがあるので、きれいな字でノートに書くことを我慢にしたいです。」と発言した。多くの子がその良さを認め、自分もノート作りを我慢にしようと考えて取組を進めた。

「字が雑だから、書き直した方がいいよ。」「〇〇さんのノートは、とても字がきれいだよ。」などの声が聞かれた。

第二・三ステージの取組

第二ステージ。「温かい反応を広げよう」「全員が発表しよう」の取組を進めてきた。

第三ステージ。「自分たちで楽しい授業をつくろう」を進めている。

子どもたちは、友達の話をお聴き、温かい反応で返すようになりつつある。自分たちの授業を、自分たちでつくることのできるよう、更に集団や個に声かけをしていく。

これまでやってきたことの中で、緩んできた部分、続けていきたい部分を子どもたちと教師が共有する。

学習の構えが身についた後も、しつこく繰り返していくつもりである。



基礎的学力の定着を目指して

掛川市立北中学校 柏木麻希

「先生、中学校では漢字は習わないんですか？」
中学一年生の国語の授業が始まってしばらくしたある日、A君が問いかけてきました。

中学校の国語の授業で漢字を扱うのは、教科書に出てくる新出漢字を軽くおさえる程度。学習指導要領にも習う漢字は明確に書かれていません。漢字ドリルを使って書き順、トメ・ハライまで丁寧に習う小学校から上がったばかりの生徒には不安だったのでしよう。

そこで私は、本校での取り組み「確かな学力向上のための手立て」を『漢字』にしようと考えました。

毎時間の取り組みにしよう！

「確かな学力向上のための手立て」とは、授業の最初の五分程度を使って毎時間基礎・基本を学習する時間をとるといいます。

小学校のように漢字を丁寧に扱うことはできないけれど、毎時間五分間漢字の小テストをするこ

しました。

毎回行うため、家庭学習での漢字ノートを一生懸命行う生徒が増えました。また、生徒へのアンケートでは、漢字テストが漢字を覚えるのに役に立つかという質問に「はい」と答えた生徒は98%でした。

さらに、毎回の授業で行う「小テスト」だけでなく、一層の定着を謀るために年に数回、範囲を指定して漢字の大テストを行っています。漢字が身についたことを実感するとともに、不明確な漢字を確認でき、漢字力の向上につながっています。



完全解答って何…？

定着を確認するための手段として、中学校では年に数回、定期テストがあります。そのテストもやったらやりっぱなしになり、定着しないままになりがちです。そのため、本校では「完全解答」という取り組みをしています。

テストが終わると、自分のテスト結果を分析し、全ての問題を解けるようにするというものです。そのおかげで、次のテストにつながるための勉強

を自分自身で考え取り組むことができます。

完全解答を授業に活かすことの効果は…

各教科で様々な完全解答を進めています。私は次のように行いました。

いつも使用している授業用ノートに、長文問題を自分の解答と模範解答を並べて書き、それを比べてどう違うのか、どうすれば良い解答に近づくのかを分析します。特に文章記述の終わり方に注意するようアドバイスをしました。また、単語で答える問題は教科書や便覧などのどこに載っているのかを明らかにし、自分の勉強法を広げられるようにしました。

完全解答を始めてから、授業で同じような内容を扱うとき、ノートの完全解答を振り返る姿が見られ、自分だけの参考書のようになってきました。自分の頑張りが次の学習に活かせることは生徒の学習意欲につながります。また、一度やったことを振り返るといえるのは、反復学習という視点でも効果があるのではないのでしょうか。

学習内容の定着にとって反復はとても大切です。生徒が自分自身で定着を感じるために完全解答の取り組みは効果的であると言えます。

基礎学力の定着に向けて、今後も取り組みを続けていきたいものです。

やらされる勉強から 主体的な学びへ！

掛川市立天浜中学校 大谷加奈子

受検対策のテキスト学習に 選択制導入

本校ではこれまで、受検対策として全員一律に自習室に取り組んできました。しかし、生徒自らが進んで自習室に取り組んでいるかという点については課題が残ります。そこで、本年度については、より主体的に取り組むことを目的として、自分にあったテキストを選ぶという選択制を取り入れました。

まずは、自習室に取り組んでいる3年生にアンケートを行い、実態をつかみました。すると、答えを写すだけになっている生徒がいること、またその理由が「難しすぎる」ことにあるという実態が見えてきました(図1・2参照)。

その結果を受け、自習室よりも基礎・基本の定着を重視した問題集を選定し、自分にあったものを

選ぶことができるようにしました。また、三者面談期間中、実際の問題集を学年廊下で紹介し、保護者と生徒にアドバイスをを行いました。

自習室は答えを写す？ 写す 9%

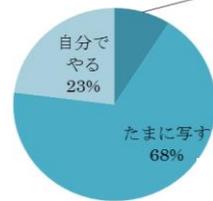


図1

自習室の難易度

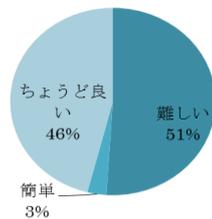


図2

「自分でやる」が二倍増！

テキスト学習への取り組みが約三ヶ月経たったところで、2年生にアンケートを行いました。すると、「写す」と答えた生徒は3%で、「自分でやる」と答えた生徒は、

46%であり、3年生と比較すると二倍に増えました(図3参照)。

テキスト学習は答えを写す？

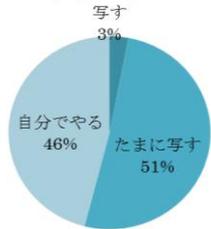


図3

勉強の成果を実感できる予想

問題作りと補充学習への取組

校内テストにおいて学習の成果を発揮させるために、学習委員会が予想問題を作成し、その予想問題から五分分出題する取り組みを継続してきました。このことにより、予想問題から出題された問題の正答率はアップしてきました。しかし、予想問題の中でもやや難易度の高い問題については、正答率に変化がありませんでした。そこで、低学力層への学習支援が少しでもできないだろうかと考え、テスト前の補充学習で低学力層の生徒を対象に、予想問題が確実に解けるように個別指導を行いました。教科は数学に絞り、生徒二、三名に対し教師一名の割合で行い、解けるようになるまで取り組みました。その結果、前回の校内テストと比較し、10点未満の生徒が5分の1に減少しました。

今回のテストでは、テスト前十日間の朝学習を計画しています。その学習内容と授業とをリンクさせながら、ポイントを絞って指導・支援をしていくことで、できた喜びを実感させていきたいと考えています。

自分の思いを表現できる子にするために

第二小学校 太田 愛

思いを表現できる子に

「・・・ぼく、書けるかな。」

子どもたちは、自分の思っていることが書けるようになりたい、それを伝えたいと心の中では思っています。しかし、自分の思いをまとめたり、発表したりすることが苦手な子が多いのも事実です。どうしたら、自分の思いをまとめられるのか、どうしたら自信をもって発表できるのか考えました。

そこで、国語科「お話紹介ポスターを作ろう」のお話を読んで感想文を書こう」という単元では、自分のお気に入りの本で、好きな場面とその理由、好きな場面の絵、主人公への手紙などを書いて一枚のポスターにする言語活動を設定しました。

見通しをもたせる

自分の思いを表現させるためには、学習の見通しをもたせ、主体的に学習させることが大切ではないかと考えました。

そこで、単元の導入では、あらかじめ作っ

ておいた「お話紹介ポスター」を使って、アレクサンダーとゼンまいねずみのお話を教師が紹介しました。さらに、レオIIレオニの様々な絵本を提示し、「みんなもお気に入りの本を見つけて、お話紹介ポスターを作ろう。」と投げかけました。見通しがもてたことで、子どもたちの中から、「やりたい。」「楽しそう。」という声があがりました。

みんなでき書き方理解

「さあ、ポスターを書いてみよう。」と活動を始めても書くことはできません。子どもたち自身が何をどのように書くのか理解する必要があります。そこで、「スイミー」のお話紹介ポスターをみんなで作えながら書くことにしました。例えば、好きな場面とその理由を書くときには、好きな文章を本文から書き抜き、わけを書くというように型を教えました。その際、自分と比べながら理由を述べることを指導しました。友達と相談しながら書いたことで、書き方を具体的に理解することができました。



自分のお気に入りの本でのお話紹介ポスター作りでは、本を何度も読み返ししながら、進んでお話紹介ポスターを仕上げることでできました。（この子、こんなにも書けるんだ。こんな風に思ってたんだ。）と驚かされるほどでした。

笑顔あふれる発表会

自分が書いたお話紹介ポスターとお気に入りの本を持って、グループになり発表会をしました。お気に入りの本でポスターを書き上げた自信から、友達に（早く伝えたい。）という思いが伝わってきました。



さらに、一通り発表が終わると、「ぼく、また発表してもいい?」と言って、二回目の発表をする姿が見られました。

今回の実践から、『見通しをもって主体的に取り組み、書き方が理解できれば、自分の思いがまとめられる。自分の思いが詰まった文章だからこそ、自信をもって発表できる』ということが分かりました。それが子どもたちの笑顔に繋がって行くのです。今後も、子どもたちが自信をもって自分の思いが表現できるような取り組みを行っていききたいと思います。

「学ぶ意欲をもち、自分の言葉で表現する子」を目指して

中央小学校 平野良直

三年理科「こん虫を調べよう」

ICTを活用した導入で、子どもたちの意欲を喚起

「これは何でしょう？」と導入で子どもたちに白い粉を渡しました。何だろうと考える子どもたちの中から「チョウの羽の粉（鱗粉）」という正解が出ると、「じゃあ、拡大して見てみよう。」という授業者の声。拡大スコープを通して見るチョウの鱗粉に子どもたちは、昆虫の世界にぐっと興味をもち、授業への意欲が高まりました。



子どもたちの思考のずれを生む資料の提示
次に、授業者が提示した物は、ホワイトボードに貼った昆虫の模型。しかし、足の付き方が違い

ます。わざと間違った物を提示することで、「あれ？」「そうかな？」「○○じゃないと思うけど！？」と言った思考のズレを生み、学びを焦点化することができました。三年生という発達段階を考慮し、ワークシートは穴埋め式の物を活用することで一人一人が自分の考えを書くことができました。

ホワイトボードを活用することで自然な練り合いへ

最後は、ホワイトボードを活用し、自分の考えを説明し合うことで自然な練り合いを生むことができました。次々と子どもたちが自分の言葉で考えを伝え合う姿が見られました。



五年国語「大造じいさんとガン」

単元目標を明確にすることで生まれた目的意識

この教材では、「朗読」を中心として読む力を身に付けさせる単元を計画しました。子どもたちと

も「朗読」をすること
を押さえていたため、「自分も上手に読みたい！」という意欲をもち、目的意識をもつて授業に取り組む姿が見られました。



子どもの言葉でつくる「学習問題」

「四はどんな場面か？」という発問への子どもたちのつぶやきを拾い学習問題をつくることができました。子どもの言葉を学習問題へと焦点化することで、主体的な学びを生み出すことができました。

自分の考えを書き込むことで表現力を向上

子どもたちは「大造じいさんの気持ちが表れている」部分を一生懸命探し、どんな気持ちが表れているのか進んでワークシートに書き込んでいました。考える時間をしっかりと確保することで、自分の考えを明確にすることができました。その後の発表でもたくさん手が挙がりました。

考える土台は学習の積み重ね

桜木小学校 守屋美保

四十五分間の授業は、長いようで短いです。子どもたちが考えるための時間をしっかりととるとあつという間に時間は過ぎてしまいます。学習をいつも一からやっていると今日学習したいことの時間が足りません。一からやらずとも前に学んだことを生かしていけばいいのです。

学びの履歴

これまで子どもたちが習得した力を指し示す言葉です。学びのカルテと言い換えてもいいでしょう。できるようになったことを蓄積していくイメージです。

そして、その学年で習得した力を次の学年で使える力にしていききたいと授業者も学習者も考えます。

その学習において「付きたい力」が付くように子どもたちは「話す・聞く」力を付けて、考えを深めています。そして授業者である教師は、考えるための「手だて」を工夫して日々実践しています。

それでは桜木小学校の実践を紹介します。

考える手立て

毎日の音読・暗唱等で、やつと文を読むことに慣れてきた一年生です。そのため、内容を読みとったり、主人公の心情を考えたりする課題では、まだまだ個人によって差があります。

そこで、授業の中では、心のメーターを使ってどちらの気持ちが強いかを話し合いました。視覚に訴えることで、

「今はこっちの怒っている気持ちが強いね。」
「ここでは、仲直りしたい気持ちが強いよ。」
等、自分の考えを発表できるようになりました。

考えるポイントを絞ったり、視覚化したりして、考える手立てをつくったなら、自信をもって発表する子が増えました。



授業の主役は、 クラスのみんな

元気いっぱい、やる気いっぱいの子の三年生。

大きな声で自分の意見を堂々と発表すること

ができます。

でも、いつも決まった子ばかりで、教師に自分の意見を聞いてもらえば満足という姿が気になりました。

そこで、まずは書く時間をしっかりと、自分の意見をノートにまとめさせました。時間内にできるだけたくさん書くことを意識させました。特に、発表が苦手な子には、赤ペンを多く入れ、「この意見すごいね。」「友達にも教えてあげたいね。」と声かけをしていきました。

次に、ネームプレートの活用です。黒板の自分の意見にはネームプレートが貼られます。同じ意見でも、言葉を付け加えたり、理由を付けたりすれば、一つの立派な意見としてネームプレートを付けます。

最後に、「伝えるのはクラスのみんな」という意識を高めました。発言する人は聴く人を見て、聴く人は話す人を見てうなずいたり、「同じです。」とつぶやいてもらうとやる気はさらにパワーアップします。

今まで、消極的で発表できなかった子が、勇気を出して発表した後の誇らしげな顔。こんな表情の子を増やしていけるよう、今後子どもたちの思いを大切にしたい地道な取組を重ねていきます。

自他を大切にし、共に学ぶことが学力向上に！

佐束小学校 太田 宜子

「もう、どうせできないもん！」

「間違ってる。そんなことも知らないの。」

低学年の子どもは、自分の思いを良くも悪くもストレートに発信します。元気があり、活発な子どもが多いクラスでしたが、そんな言葉のやり取りから、自分に自信をなくしたり、友だちの言葉に傷ついたりしている場面が、一日に何度もありました。すると、授業では、だんだん挙手をする子どもが減り、自分の考えをノートに書かなく、意識も低下。何とかしたいと思いました。失敗を恐れず、自分に自信をもち、子ども同士で学び合うには、どうしたらいいか考えました。

学力向上は、「日々の授業から」

学校生活の中での、ほとんどが授業時間です。日々の授業が充実していると、必ず学級の雰囲気も盛り上がってきます。そのためにも、毎時間の授業がとても大切になってきます。子どもたちが興味を引くようなものを、そして授業の最後には、「なるほど」「できた」と実感できるように、授業の組み立てを考えました。特に、学びの足跡が分かるような黒板の書き方に力を入れました。すると、どの子どもも瞳を輝かせ



て授業に参加するようになりました。

自分の考えや思いが書けたら、誰かに聞いてもらいたいものです。ペアをつくって、順に自分の考えを伝えます。聞いた相手は感想を伝える、というルールも作りました。始めは、伝え方が分からなかったり、恥ずかしがったりしてなかなか伝え合えなかった子どもたちも、聞き手から「同じ考えです」「…ってところが素敵です」などと反応が返ってくるたびに、自信をつけていきました。



自信を膨らめる「魔法の言葉」

授業で自信をつけはじめた子どもたち。私もさらに自信を膨らめる作戦に入りました。誰でも褒められると、心が温かくなり、何より自信がついてきます。「○○の気持ちが分かるように書いているね」「みんなの方を向いて言えて、発表名人だね」伸びやがんばりを見つけ、たくさん褒めるようにしました。一人一人を、グループを、クラスを、とにかく褒めました。間違えた子どもにも挑戦したことやがんばったことを褒めました。すると、子どもたちが笑顔が増え、進んで挙手したり、書いたりするようになってきました。

また、帰りの会で、友だちのよい行いを発表する場を作りました。話すことが大好きな子どもたちなので、毎回十人以上の子どもが前に出て発表します。一日の終わりに、全体の場で認めてもらい、みんな温かい気持ちになり、笑顔で帰ることができました。

「筆箱は、授業の大切な勝負道具！」

やる気や意欲があっても、ノートに書くこうとして筆箱を開けると、芯が折れている鉛筆が一本しかなかったり、消しゴムがなくなったりすると、一気にやる気がダウンしてしまいます。全校で筆箱の中身を揃える取組をした時には、意識が高まり、筆箱の中身が揃ってきました。表をつくり、昼の放送でも良いクラスに紹介されるとみんな喜び、達成感も味わうことができました。また、授業も集中して取り組めるようになりました。

その取組の様子を保護者へも懇談会や学級通信、本読みカードで伝えることで、更に積極的に協力してもらえようになりました。

自信がつき、パワー溢れる子どもたち

四月の頃から比べると、自分のがんばりや成長を自慢として言える子が増えました。様々な経験やこつこつと積み上げた温かな言葉が宝となり、大きな自信となりました。その力が、自分の心を強くし、九九や漢字等の確実な習得への粘り強い取組にもつながりました。また、仲間と共に学ぶよさや喜びを体感し、積極的に発表したり、教え合ったりすることができるようになりました。今後も、一人一人をじっくりと見取り、日々の授業を大切にし、学力向上を目指していきたいと思



さぐかつ子学カアップ週間		2年			
10.14	10.15	10.16	10.17		
18	28	26	29		
30	30	29	29		
X	☺	☺	☺		

自分の考えを表現する力を育てる

千浜小学校 兼子裕美

「間違っていたら恥ずかしいから。」

子どもたちの大部分が発表することへの抵抗を感じていました。また、「授業が難しい」と感じている子どもも多くいました。「どうしたら子どもたちが楽しんで取り組みながら、目指す力をつけることができるのだろう。」と考えました。単元のゴールに、子どもたちが「やってみよう」と思うようなまとめの表現活動をきちんと位置づけることで、一時間の授業に対する意識が変わり、表現する力が育つのではないかと考え、実践に取り組みました。

国語で表現の型を教える

『学級討論会をしよう』では、討論のテーマを二つに決め、自分で選んだことで、討論の準備への意欲も上がりました。また、賛成・反対の両方の立場の意見を考えたことで、視

点を変えるといろいろな考えが持てることを実感しました。この学習を通して、正しいか間違っているかを気にしていた子どもたちが、いろいろな意見を出し合ったり、より説得力のある意見を考えたりすることが大切だということに気づくことができました。

『平和について考える』では、平和への自分の願いを意見文にまとめ、スピーチ大会をしました。授業の導入では、「平和」とは何かを話し合い、「いじめのない社会」「戦争をなくす」「けんかをせずに思いやる」など自分の素直な考えを出し合いました。六年生の今の自分の意見を素直に表現できるとよいと伝えるところ、「ぼくたち子どもの意見を、大人の人に聞いてほしい。」という声がありました。そこで、単元のゴールに「参観会で家の人に向けてスピーチをしよう。」と設定しました。まず自分の考えを「要旨」として端的に表し、それを軸にして資料を引用したり、反論を想定したりして意見の内容を膨らませていきました。構成の型やより伝わる組み立て方の指導を丁寧に行い、言いたいことをより短くまとめたことで、長文を書くことへの苦手意識が少なくなったように感じます。

スピーチ大会では、お互いの発表に対し、「声の大きさ」

「強弱」「表情」

「姿勢」など視点を決めて聞き合いました。

友達から評価や感想をもらい、自分の発表の課題を素直に受け止め、意見が伝わったことの喜びを味わう姿が見られました。こうして、表現の幅を広げてくださいました。

相手意識がやる気の源に

学級会を通し、どの子どもも発表することへの抵抗は少なくなってきました。また、目指す授業「ハッピー授業」を達成するために、「発表を増やす作戦」を話し合い、「班で発表回数を競争しよう。」「よい意見が出たら拍手をしよう。」など、自分たちで考えた作戦を実行しました。すると、友達に励まされながら手を



挙げる子の姿も見られるようになり、授業での発言も増えました。

こうして、話しやすい雰囲気のを土台を作りながら、より伝わる表現力を身につけるための活動を取り入れました。



道徳では、「社会を明るくする作文」を書きました。昨年度の作品を二点紹介し、感想を交流しました。生活の中の小さな喜びや疑問を見つけ出す活動では、よく聞きながら思いを引き出しました。小さな出来事にも子どもは思いや願いを持っており、こんな社会になつてほしいという願いをこめて等身大の思いを書くことができました。

また、海の子(総合)では、東京のパンフレット作りや、修学旅行の思い出新聞、修学旅行発表会で表現活動を行いました。楽しかった自分の思い出は新聞にまとめ、まだ気持ちが新鮮なうちに書き上げたことで、どの子の新聞も生き生きとした表現が見られました。国語の『自分たちの町を紹介しよう』で学習したパンフレット作りを活かし、見出しやレイアウトの工夫も意欲的に取り入れました。参

観会では、家の人に向けて学んできたことを発表しました。学んだことや楽しかったエピソードなどを織り交ぜ、グループで分担して原稿を書きました。発表会の形式は、中学の入学説明会で見たスライドを使った発表を参考にすることで、具体的なイメージを持つことができました。また、グループごとに、協力して作り上げる楽しさがあり、それが「伝えたい」という意欲へとつながっていききました。練習のたびに、原稿を少しずつ修正するグループもあったり、「作文を書くのがわりと得意になった。」と言う子もいたりして、やってよかったと思える活動になりました。保護者の方がうなずいたり笑ったりしながら聞いてくださり、子どもたちが伝わっているという実感をもてたことも収穫でした。



表現する喜び⇨伝わる喜び

子どもたちのノートを見ると自分の考えをしっかりと持てている子が多いことがわかり

ます。「せっかくないい考えをもっている、伝えなければもったいない。」「自分だけがわかっているのではなく、みんなと意見を交流するから新たな発見があり、学習が深まる。」と言いつづけてきましたが、なかなか発表にはつながりませんでした。今回の実践で、「相手意識をもち、何を伝えたいのかを明確にして発表する場を設定する」「ノートやプリントには、できるだけ担任のコメントを書く。」ことを意識して取り組みました。一番大事なことは、聞き手や読み手である教師が、表現したことに対し、コメントや評価(ほめる、アドバイスをする)するを通して、作文や発表をしつかりと受け止めたというサインを子どもたちに送ることだと感じました。

地域の先生にお世話になったときには、お礼の手紙を書きました。数日後、丁寧な返事をいただきました。子どもたちはとてもうれしそうに手紙の内容を聞いていました。こうしたことの積み重ねが、表現を嫌がらない子を育てるのではないかと感じています。

この取り組みを続け、さらに、どんな時でも堂々と表現できる力を伸ばしていきたいと考えます。

生きて働く国語の力をつけるために

日坂小学校 原田幸子

本校では、今年度国語科の説明的文章教材を窓口として研修を進めてきた。

- ① つけたたい力を明確にし、学校全体で共通理解を図ること。
 - ② 単元のつながりを意識すること。
 - ③ 学年ごとの積み上げを意識すること。
- 以上三点を、職員全員で意識しながら国語の授業実践を行ってきた。

一年生では、①のつけたたい力を明確にすることに重点をおき、授業で身につけた力を生活の中で活用できる力につなげることを目標に研修を積み上げてきた。

ホップ！「おなじぶんがくじいむも。」

一年生では、まずすらすらと読めるようになることが大事だと押さえ、音読に力を入れるようにした。一年生の教材は、繰り返ししのパターンの文章が多いため、何度も読んで、リズムに慣れさせるようにした。「おうちの人にお話してあげるように読もう。」と、相手を意識して読ませるようにし

てきた。

「くちばし」では、何回も読むうちに、問いと答えの文章が、同じパターンで何回も出てくることに気づき、そこから、説明的文章教材の基本となる、問いと答えの文章について理解を深めることができた。

「鳥のくちばしクイズ」づくりでは、抵抗なく問いと答えの文章をつくり、友達同士でクイズを出し合い、楽しむことができた。

ステップ！「こんな虫、みいつけた！」

次の説明的文章教材「みいつけた」では、生活科の学習と関連づけ、自分が見つけた虫についての紹介文を書く言語活動を取り入れた。

自分が見つつけてきた虫の居場所を友達に伝えたいという思いが、教材文をよく読んで、書き方を学ぼうという意欲につながっていった。

「わたしたけのじどう車ずかん」

「じどう車くらべ」の学習では、自分のお気に入りの自動車について、自動車図鑑を作る言語活動を設定した。「じごと」をするためにどのような

「つくり」になっている

るかというパターンの文章を作るためには、資料から必要なことを



抜きだす力も必要になる。そのために、授業の中で、「じごと」と「つくり」がつながりあるものとしてとらえられるような読み方の指導を取り入れた。図鑑などの資料を読むときの視点ができ、自分の図鑑作りに生かすことができた。

また、本校では、今年度全校で視写に取り組んでいる。火曜日の朝は、どのクラスでも視写を行うのだが、子どもたちの文字を書くことに対する抵抗感が減り、書くスピードや正確さも増してきている。図鑑を書くときにも、その力は生かされていると感じた。



ジャンプ！「二年生へゴー！」

学習を進める中で、子どもたちの発表の仕方にも変化が表れるようになった。「答え」を言う前から、「理由」を述べるパターンや、接続詞を使って、話を進めることができるようになってきたことがある。

一年生にとっては、言葉や文章との出会いは常に新鮮である。また、すぐに吸収できる柔軟さもある。この機を逃さず、「国語って楽しい！」という思いをたっぷり味わわせて二年生に送り出した。

「わかった・できた」を実感できる学び

曾我小学校 北原康宏

本校は、研修テーマ「子ども一人一人が「わかった・できた」を実感できる授業」を目指して取り組んできた。一年生の実践を紹介する。

1 はじめての勉強！

本校では、「学習準備」「聴く」「話す」を基本の学習3として取り組んでいる。一年生のうちから学びの構えをきちんと身に付ける指導をしている。

(2) 家庭学習のおさえ
年度始めに、基本的な家庭学習について便りを出している。(学年×10+10)分の時間を基本とし、読み、書き、計算の宿題を提示している。また、読書や作文(日記)を週末の宿題に位置づけてきた。

(3) 音読

「話すスキル」を毎朝活用し、声に出して文章に触れるようにしている。年一回コンテストを実施しており、校長をはじめ教師に評価してもらっている。また、ステージ式など全校集会の場でも音読を披露している。子どもたちは、意欲的に取り組み、自信を持って音読できるようになってきた。



2 「わかった・できた」①

本校は、算数科を窓口教科としている。子どもたちが「わかった」「できた」を実感できるための手立てを講じて、研修を積み上げていく。「繰り下がりのあるひき算」の実践を紹介する。

〈学習問題〉

12-3 一の位同士ひけない。
どうやってひくのか考えよう。

減加法と減法があるが、減加法に焦点をあて、ブロックや絵を使って、ひき方を説明させた。

その際、既習の繰り上がりのたし算同様「まず」「次に」「最後に」のつなぎ言葉を利用させることで、わかりやすくさせた。繰り返し話をさせたり、いろいろな子に説明させたりした。説明とブロック、絵が連動することで、「同じ考えだ」「ぼくとは違う考えだけど、答えは同じだね。」などひき方の理解が深まった。



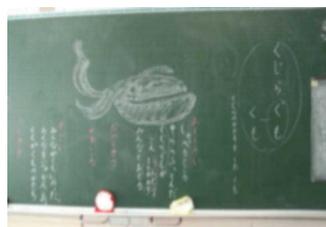
3 「わかった・できた」②

研究授業だけではなく、日々の授業実践の充実が、「目指す授業」には欠かせない。そこで、単元を貫く課題を設定した。そのためには、学習指導要領等でつきたい力を確認し、単元を見通した学習計画を作るようにした。国語科の実践を紹介する。

「くじらぐも」

〈学習問題〉
友達の手紙の良いところを見つけよう。

物語文「くじらぐも」を読み取ることはもちろん大切だが、「くじらぐも」を通して、書いた物を読み合いたいことを、単元の初めに伝えた。目標はいつも見えるようにし、学習の流れを説明した。途中で原点の目標に戻ったりもした。
「次は、学校に戻る場面だね。」「感想を書いたら、みんなに見せるよ。」など、見通しを持った学習ができた。



4 ふりかえり

実践してきた結果の評価の一つとして、「たしかめテスト」を実施した。80点以上を合格として、繰り返し練習し、再テストして理解をより深めた。
また、職員・児童・保護者にアンケートを採って様子を分析した。
成果は認め、自信をつけるようにし、課題は、次回の目標として努力することができた。

おわりに
「わかった・できた」に焦点をあてることで、ねらいがはつきりし、よりよい実践を積み重ねることができた。一年生にとって、「わかった・できた」が増えてきた。実態を考慮し、より学びが深まるように、今後も取り組みたい。

「歩み出そう」「わだおか」!

和田岡小学校 萩田歩

わ「わだおか」 学びの構え

わ..忘れ物ゼロ。整理整頓。ピタ、ピン、グー。
だ..だれでも、いつでも、守ろう時間。
お..落ち着いて聴き、しっかりと反応。
か..顔を見て、しっかりと発表。

昨年年度の教育課程編成。「学びの構え」を押しえた本校。学びのユニバーサルデザインの一つとして、全学級、教室前面に掲示をした。忘れた物ゼロに向けては指導を継続中であるが、本校児童のよさである素直さが、前向きに学ぶ学習態度となつて表れている。



だ誰もが学力を身に付ける工夫

日々、行われてきた様々な工夫。どの教科でも国語辞典を常備し、いつでも活用。教室環境の一つとして、ことわざや慣用句のカードを掲示。本も紹介。休み時間に親しむ姿がある。また、特に高学年では、道德教育と相まって、

尊敬語・謙譲語を自然に使う姿が広まっています。家庭学習で定めた日記指導を実践。そ

して、「自学」を推奨。毎日の漢字書き取りや算数のドリル学習などはポイントなどを工夫して紹介している児童を、よい刺激とし、思考力・表現力を切磋琢磨する姿が見られた。例年のものから問題数・枚数の多いものに変更。教師の教材研究の多いものになると同時に、児童にとつては量に慣れる経験となつていく。

「積小為大」。二宮金次郎の教えを合言葉に取り組んできたことが、実を結びつつある。

お押さえる、仕掛ける、確かめる

特にして、「仕掛ける」段階では、児童が説明する場を多く設定。その中



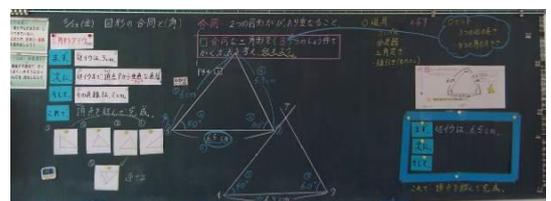
で、教師がわかり返したり、違えたり全員参加場面を○×で全員の参加を設けたりした。的確に伝える力も、「まず」な伝え順序を表す表現や一文で答えることを意識化する。高まっ

てきている。授業実践を支援する児童の日常的な授業や児童の態度を交流する職員室を特に、言語活動「単元を貫く」情報交換が行われた。また、全校共通で「発表名人カード」を作成し、活用。挙手が少なかった児童は論理的説明力を伸ばしている。

児童は論理的説明力を伸ばしている。

か確実に次の一歩を

任の立場から実践について、研修主任に努めてきた。家庭に対して、啓蒙年便りを通して、定期テストの結果・考察等を伝えてきた。学力向上「縦の接続と横の連携」で力点を置く研究である「道德」でも力した成果を来年度も継続したい。



「やる気」「やる力」「たくまじく」 をもった子どもへの育成

確かな実践力を育む道徳教育の推進

掛川市立桜が丘中学校 澤瀬 崇

道徳教育と学力向上はひとつの ものがたりとなった

桜が丘中学校ではこれまで以下の三点を中心に道徳の実践を進めてきた。

- ① 生徒や学級の成長との関連。
 - ② 内容項目と生徒の日常との連動。
 - ③ 生徒内部での各内容項目の統合。
- これらの実践を基盤にして平成二十六、二十七年度の二年間、桜が丘中学校区では道徳教育支援事業の指定を受け、新たな桜が丘道徳の構築に取り組み学区全体で道徳教育の一層の充実を目指している。



実践の中ではつきりしてきたことの一つは「道徳教育の実践は教科指導や学力向上とも密接に係っている」ということである。まさに実践のものがたりといえる。

道徳授業の基本型は教科の授業 改善にも通じるのであった

まず道徳授業の基本型を学校全体で実践した。基本型とは「導入」「展開前段」「展開後段」「終末」の四つである。「導入」では本時で学習する価値の方向付けと生徒の興味・関心を高める。「展開前段」では資料から登場人物等の立場で考える。ここでは



まず中心発問を考え、次にそれを生かすための前後の発問を考える。「展開後段」では十分に時間を確保し、自己を見つめ振り返る場とする。「終末」では道徳的価値について考えをまとめ今後の発展につなげる。価値の押しつけにならないように余韻をもって終わる。校内研修等を中心に、この基本型を基にした授業実践を重ね、定着してきている。

生徒同士が関わりあう道徳授業と学力向上は実は目的を共有しているのであった

「やっぱり授業力ですね。」実践の中で何度かこのことが話題になった。ただ単に基本型で授業を進めるだけではよい授業はできない。授業研究を通して挙げられた改善点は主に以

下の二つである。一つ目はいかに生徒の心を揺さぶる発問ができるか。二つめは生徒同士が関わり合い、意見や考えを練り合えるかである。「生徒の本音を引き出し、その意見をつなげる。」「意図的な指名をして考えを深めさせる。」「この二つがうまく機能していなかったのである。練り合いの方法や発問の工夫について確認し直して実践を進めることになった。このことは学力向上のための手立てとも関わりが深い。

生徒は変容し学力は向上した

授業実践のポイントが明確になり、一時間の授業の中で生徒の変容が確実に見られるようになったことは大きな成果である。「はじめは〇〇と考えていたが△△と思うようになった。」や「〇〇さんの考えを聞いて自分の考えと違い刺激を受けた。」などの感想が多く出るようになった。心を揺さぶる発問と練り合いの工夫により生徒同士が関わり合い、考えを深めることができるようになったのである。



現在、地域の方々からの協力もいただき、さらに視野を広げて、生徒は意欲的に活動している。今後の桜が丘中生の成長と活躍が楽しみである。

校内研修の充実を

目指して

北中学校 鈴木未佳

本校の校内研修について

本校の校内研修の研究主題は、「高め合う授業」である。学習指導要領が示すつきたい力を教師が理解したうえで、生徒が「理解したい。できるようにになりたい。」と強く思うような学習問題を提示し、生徒の学びが高まるような小集団学習や関わり方を意図的に設定することで、研究主題に迫っていこうと考えた。

外部講師の招聘

教師の授業力を向上させるためには、「よい授業を見る。自分の授業を見てもらう。授業力のある人の話を聞く。」ことが必須だと考え、校内研究会で外部講師を招聘した。第一回校内授業研究会では、静岡大学教育学部教授を講師に迎え授業

を参観していただくとともに、事後研修で小集団学習を行うメリットやねらいについて講義をしていただいた。小集団学習をいかすために、①良さを伝える②ルールを示す③自分の考えを持つ④教師が追求の様子を把握し、その後の展開につながるようにするという段階を踏んで行うことを知り、授業で意図的に取り入れる重要性を学ぶことができた。

また、夏季研修では、若い教員が多い本校の実情を考え、「教科を教える意義」について講義をしていただいた。講義を受け、プロの教師として教科の目的を理解し指導展開していくこと、どんな力を身につけさせたいか意識しながら生徒に追求させ、指導展開を工夫することなどを改めて意識することができた。



第二回校内授業研究会

会では教師を四つのグループに分け、代表者が中心授業を行い、それぞれのグループに授業力が高く経験豊かな外部講師を招いて参観していただいた。事後研修

を少人数で行うことができたので、発言の多い充実した時間となった。また、講師に直接授業作りや教科観を質問をする時間が確保され、中心授業を行った教員にとっても大変貴重な時間となった。

まとめ

外部講師を招聘し授業を参観していただき、助言をいただくことで教師の授業力の向上につながった。そして、小集団学習を授業で行うことが、生徒の理解を一層深めることが手応えとして感じられるようになった。

しかし、小集団学習は、目的に応じて方法を変え、適切に用いなくてはならない。来年度は、教科ごとに小集団をどんな形で行っているか研修を積み重ね、引き続き外部講師を招聘し校内研究会を開催することで、一人一人がプロ教師としてさらに生徒の学びを高める授業を作りたい。



おおすか型授業スタイルの確立

大須賀中学校 沢田佳史

時間が足りない！

「考えを深め合うことのできるおもしろい授業を作りたい！」。教員になってからいつも考えていることです。五〇分という限られた時間でやりたいことは四つ。

- ① 前時までの学習の振り返り
- ② 学習課題の確認
- ③ 追究・班の仲間との練り合い
- ④ 学びの共有・確認・まとめ

特に③、④については授業のもっとも面白い場面。生徒が多様な考えをもち、それらを仲間と練り合う中で新たな気づきが生まれる。「ああそうか！」「私の考えはね…」誰もが学びの実感を得られる瞬間です。本当はこの二つに何十分もかけたいのです。しかし、授業の時間が足りません。

生徒の確かな学力向上のために、本校では新たな授業の型「おおすか型授業スタイル」をつくり始めたのです。

家庭学習は授業と合体！

学年が上がるにつれて①の振り返りしたいことは増えていきます。振り返りのために図形やグラフをかいているうちに数十分経ってしまうということは珍しいことではありません。そこで、家庭学習の予習にこれまで授業で行っていた振り返りを充てることにしました。授業で追究するために必要な知識技能が身につけている確認するために、予習課題として課すのです。第三学年「図形の相似」では第二学年で学習した三

角形の内角・外角の予習や第一学年で学習した比の性質を家庭学習で学び直しました。また、家庭学習で使用したプリントはプロジェクトで投影し、授業中にいつでも振り返ることができるようになりました。このことにより、授業開始とともに学習内容に入ることができるようになりました。

課題はスッキリ！

これまでの授業では学習する内容に関する課題を与え、生徒が考えるべき問題を生徒自身が発見できるように、授業を展開していました。時には、この時間が想定よりも多くなり、追究の時間を削ることもありました。おおすか型授業スタイルでは、学習課題をシンプルでわかりやすいものにするので、追究する時間を長く確保するようになりました。目標は授業開始五分後に追究です。

新たな学び方！

おおすか型授業スタイルを取り入れることで、新たな学び方ができるようになりました。今年度数学の授業で行った実践を紹介します。

大須賀中ではタブレットPCが一人一台授業で使用できる環境が整っています。相似の授業では、補助線を引いて相似な三角形をつくりました。従来は、生徒はホワイトボードに図を新たに書き、色づけして班の仲間に確かに自分のつくった三角形が相似であることを説明していました。しかし、タブレットPCのマ



「カー機能を用いると、新たに図をかく時間が必要なくなるため、班活動のテンポがよくなり、全員が多様な考えを説明し合い、学習内容を深く理解することができました。」

円周角の性質を探す授業では、ジグソー学習法という方法を行いました。三つのグループにそれぞれ異なる円を与え、三つの視点から考えたことを組み合わせて性質を探し出す学習で、生徒一人一人が主体的に学習に参加し、問題解決に向けて力を発揮することができました。終末では65インチの大型電子黒板を用いてそれぞれのグループの考えを交流させることで、新たな気づきが生まれ、円周角の性質を生徒一人一人が自分なりに納得して認めることができました。

このように、個人での追究や班での学び合い、全体での交流、まとめに十分な時間がかけられるようになったことに加えて、ICT機器や新たな学習方法が組み合わさることで、生徒一人一人が力を発揮して、考えを深めることができるようになりました。

これからの授業は…

教室には数学が得意な生徒もいれば苦手な生徒もいます。教師が説明することで納得できる生徒もいればそうでない生徒もいるということです。そのような環境で生徒一人一人の学力を向上させるためには、一人一人がもっている力を発揮しながら、主体的に学ぶことが必要です。家庭学習やICT機器がその主体的な学びの支えとなり、生徒が学びたいと思う課題にじっくりと時間をかけて向き合い、考えることができる授業をこれからもつくりたいと思います。

当たり前前を大切に

西郷小学校 羽賀 英俊

○当たり前前のこと

「当たり前前のことは、できて当然」ではなく、「当たり前前」が当たり前前にできることはすばらしい」と、子どもたちに思ってもらいたい。自分のことに自信のない西郷の子どもたちに、「それができれば大丈夫、自信をもってがんばれ」と、言ってもらいたい。それが、「当たり前前」の大切にする「のねらい」です。できないことを注意するよりも、できたことを褒めることで、子どもたちは、随分、自信をもって活動できるようになってきました。朝の「おはよう」から、職員室に入ってくる時の「失礼します」まで、あいさつの声が大きくなりました。高学年の委員会などでの話し方も伝わるように言おうとする姿勢が感じられるようになりました。ステージ式の代表の発表が、はきはきとした声で自分のがんばりを言えるようになりました。日常の生活で、授業で自分の思いや考えをさらにしっかり伝えられるようさらに支援をしていきます。



○学びの十二か条

基本的学習習慣づくりからの学力向上をめざして、「学びの十二か条」を作りました。「前」の日に予定を書く」「家で明日の準備をする」「授業はチャイムで始める」「字を丁寧に書く」など学校や家庭でやるべきことがスキルとして身につくように指導しました。スキルが身についたかどうかは、スキルチェックカードで確認しています。

昨年比べても、家庭学習の習慣が身についてきました。授業中も、姿勢よく座って授業を受けるようになってきたり、相手の方を向いて話を聞く態度が育ってきたり、変化が見られます。

このことが、学習に対して積極的な態度につながりつつあります。

○かがやきタイム

「算数の積み上げができていくか確かめたい。」「今まで習ったところをつまづいていない子を見たい。」「

水曜日の十五時三〇分～五〇分に今まで算数で習ったことを復習するミニプリントを毎週行いました。

子どもたちは、「簡単、簡単」とどんどんプリントを進めたり、「ここ、どうするか忘れてる」と、先生に聞きに行ったり、自分の力

に応じて学習を進めています。

また、最近のいろいろな調査で、子どもたちが使っている言葉の数は、思ったより多くなかったり、慣用語やことわざも案外知らずに生活していたりすることが分かりました。

そこで、火曜日の八時〇二分～一二分には、「子どもの語彙数を増やしたい」「主語述語や接続語のはたらきなど文法の力を伸ばしたい」と国語のプリント学習に取り組んでいます。

簡単な虫食い問題や繰り返しの問題ですが、基本的な助詞の使い方など基礎的基本的な文法の定着の確認ができました。

ステージごとのチャレンジテスト、一月の定着度テストと併せて、子どもたちの基礎的な学力の支えになっています。



○音読タイム

よい発声の仕方やはっきりとした声で話す話し方を身につけさせるために、朝、学級で声に出して詩や文章を音読しました。

各学年で、月ごとに音読する詩などを決めて、朝の会で学級みんなの声に出して毎日読むことで、はっきりとした発声ができるようになってきました。

ともにめざせ！ ともにかがやけ！

倉真小学校 三澤 佐知与

〈やまびこあそび〉

登校班から聞こえる大きな挨拶が倉真地区にこだまする。さあ、一日のスタートだ。他校にも紹介されて、子ども達も自慢だと自負している。

保護者、地区の方ももちろんのこと学校近隣の会社の方も挨拶をかわしてくる。挨拶の輪が広がっているのがうれしい。



〈チャレンジ遠足 めざせ 粟ヶ岳〉

本校は、全校七十三名と小規模校である。そのため互いをよく知り仲が良く、助け合い、協力することができる。四月に全校で粟ヶ岳山頂へ登るチャレンジ遠足がある。往路は、低・高学年で、復路は、縦割り班で行動する。三年生が一年生の荷物を持ってあげたり励ましたりと思いやりの姿が見られる。高学年は、縦割り班の友達を常に見守りながら行動することができた。

〈冀北プロジェクト〉・学び

本校児童は、課題にまじめに取り組み、自分なりの考えや思いを意欲的に伝えることができるようになった。本年度、説明する力身につけた子を育成するためにICT（デジタル機器）を効果的に活用してきた。

〈「かけがわ型スキル」の思考力、問題解決力、意志決定力を考慮した授業の実践〉

・証拠となるものを見つけ、工夫して筋道を立てて自分の考えを述べることができた。電子黒板や書画カメラなどを活用し大きく映すことにより、自分の意見の立場を明確にしてから理由をつけ、発言することができた。子ども達の思考を支援した。

・考えや図を比較したりまとめたりして分かりやすく伝えることができた。電子黒板により、子ども達の考え方の共有や新たな発見への気づきが、しっかり確認でき、発表者は効果的な表現方法で発表することができた。

（例）算数では、追究する場面で立式した理由を説明したり、どの言葉を根拠に立式したかを比較しながら話し合ったりすることができた。

（例）体育では、写真や図など、様々なコンテンツを

使い、手本の動画を参考にしたり、撮影した動画を参考にしたりして、マット運動の技をできるようにした。

（例）家庭科、保健体育では、資料を子ども用タブレットPCに提示して話し合う活動を繰り返し広げた。問題点を明確に示し、タブレットPCにペンで記入することができ時間短縮ができた。追究の時間に十分な時間をとることができた。

このように、「押さえる、仕掛ける、確かめる」の授業展開の中で、どの場面でICTを



使えば効果的かが少しずつ分かってきた。従来の授業スタイルにICTを上手に融合させることが大切である。

〈冀北発表会〉

生活科、総合的な学習の時間での学びを他学年、保護者、地域の方に発表する場である。五年生は、米について調べ、品種改良の意義、米粉を使ったよさ、米の使用量を増やす努力、自分たちが育てた経過などをプレゼンテーションと劇との両方を使い説明することができた。どの学年も自己課題を設定し解決し、地域の方にも好評だった。

〈金次郎プロジェクト〉・特別活動

ふれあい体育祭では、地区と学校とが一緒になり体育祭を行っている。一緒に競技するものもあり、地域とのつながりも実践できた。



〈金次郎魂〉

倉真小児童の合い言葉は、「金次郎魂」である。至誠、勤労、分度、推譲四つの教えが込められている。今年度は、かけがわ教育の日に「金次郎を知る会」を上演した。放課後や休日にもグラウンドの草を取り働くことを惜しまない素敵な子ども達である。これから一緒に歩んでいきたい。



報徳の教えで 心の教育を

西中学校 松浦芳志

希薄な人間関係

「最近の中学生は元気がなくなつたなあ」とあるベテランの先生の言葉です。そんな子どもたちの心を耕してみると学力にどんな効果が見られたのでしょうか。

あいさつでハイタッチ

西中では「あいさつと掃除」が生徒たちの伝統と誇りでもあります。今まで「あいさつ運動」は生活委員が中心の活動でした。でも「別に他の人がやったって良いよね」部活や学級など色々なグループがあいさつ運動に加わりはじめました。この活動を見たPTA役員も「ハイタッチができるのほりを作ろう」とPTA活動と生徒会活動が一体となり、「あいさつでつながろうプロジェクト」が始まったのです。



あいさつのできない恥ずかしがり屋さんも、そっと手を出してタッチしていくようになります。

「創自」と「徳の日」

「報徳の教えの『勤労』を生徒会活動に取り入れてみよう」「ホウトク」にちなんで毎月十九日を「徳の日」と定め、行動する事になりました。各委員会は、報徳の教えにちなんだ活動を創意工夫しました。特に「自らを創る清掃活動」は毎日「創自」を意識して取り組みました。自分の分担が終わったら、汚れを見つけたら、汚れを見つけたら、名付けて「見つけ清掃」も始まりました。西中に「勤労」の精神が広がり始めました。

報徳サミットと金次郎賞

「報徳に詳しい方を呼んで、私たちの取組について聞いてみよう。」そこで尊徳七代目子孫の中桐万里子氏をお招きして「報徳サミット」を行いました。「目立つ活動だけでなく、見えない活動を掘り起こし、共に生活しましょう。」中桐さんの言葉です。活動発表後、子どもたちが善行を互選する「金次郎賞」はまさに、掘り起こしの作業。周りの何気ない優しさ、当たり前の方ができる大



切さ。表彰に喜ぶ笑顔や、自然に出る歓声を聞き、「子どもたちが報徳の教えを理解し始めたね。」と中桐氏。手応えが感じられた一幕です。

心を育み学力向上へつなぐ

これらの取組が生徒の学力向上につながった事を明らかにするのは難しい事です。しかし、学級では九割以上の生徒が「いじめはなく楽しく生活している」、「時間や決まりを守って生活している」と答え、「話し合いでは周りの意見を最後まで聞くことができる」、「自分の意見を発表することが得意」な生徒が増加傾向にあり学習規律が定着しています。また年間三〇日以上出席者が平成二一年度の三二人から平成二五年度は二〇人となり、問題行動も半数以下に減少しました。近年では五人の不登校生徒が学級に戻った年もありました。並行して子どもたちの自尊心も大きく伸びています。

こうした、「心と体の教育」を推し進めることで生徒同士の関わりが良好になり、生徒の授業取組アンケート(意見を聞ける・積極的に発言している・あきらめない)では五点満点で平均四点以上になりました。

心豊かに仲間と磨き合う姿が子どもたちの学力向上にも効果が出ることを期待して、今後も教育に努めます。